

立命館大学生のボランティア活動の意識・実態調査報告

とボランティア活動の具体的支援

立命館ボランティアセンター設置を視野に入れて

企画研究 ・ ボランティア研究グループ(VCTP 修了生)
足立陽子 / 市田好美 / 加藤祐子 / 白樫 俊
高橋操実 / 高道純子 / 土屋春葉 / 花田暢子
堀野英昭 / 山村麻里 / 吉田ゆかり

【目 次】

第一章 . ボランティアコーディネーターについて	9
第一節 . ボランティアコーディネーター養成プログラム (VCTP) の紹介	9
第二節 . ボランティアコーディネーターの発展の略歴と役割	9
第三節 . スチューデントイニシアチブ科目「企画研究 (自主企画研究)」 の紹介と研究テーマ	12
第二章 . 研究動機	13
第一節 . VCTP 修了学生が企画研究で取り組むまでの経緯	13
第二節 . 企画研究 における研究動機と課題そして研究方法	13

第三節．ボランティア活動を支援する理由	14
第三章．実態調査分析の概要	16
第一節．個人を対象にした調査の概要	16
第二節．意識・実態調査分析 生活実態調査（基本属性）	17
第三節．意識・実態調査分析 ボランティア意識調査	18
第四節．サークル・クラブによるボランティア関連活動	32
第五節．立命館大学（衣笠キャンパス）におけるボランティア関連科目	34
第四章．自由面接法によるヒアリングから見る具体的支援策	
ボランティア活動に対する関心と活動の結び付き	38
第一節．ボランティア活動経験のきっかけの差	38
第二節．動機とボランティアイメージとの関連性	43
第三節．ボランティア活動をするに際しての活動段階別必要支援の違い	47
第四節．効果的なボランティア活動のきっかけづくり	51
第五節．ボランティア活動の位置付け	55
第六節．ボランティア・ボランティア活動に関する魅力	60
第七節．ボランティア・ボランティア活動に関する欠点	64

第五章．具体的支援を可能にする体制	
立命館大学ボランティアセンター設置を視野に入れて	
.	67
第一節．ボランティアセンターを地域にではなく大学に設置する意義	
.	67
第二節．他大学ボランティアセンターの実態概要	
.	70
引用文献・参考文献一覧	
.	75
付録資料	
ボランティア活動に関する意識・実態調査 調査票	
.	77

第一章． ボランティアコーディネーターについて

第一節． ボランティアコーディネーター養成プログラム(VCTP)の紹介

ボランティアコーディネーター養成プログラム（以下、VCTP）は、1999年度より財団法人キリン福祉財団の支援により社会福祉法人京都市社会福祉協議会と立命館大学産業社会学部による学術協定事業（ボランティア社会プログラム学術協定）として開講されている。3 年のプログラムであったため、2002 年度からは新たに京都醍醐ライオンズクラブの援助によって継続開講することができている。全国社会福祉協議会モデルに準拠しながら、コーディネーター業務についている現職職員だけでなく、現役学生やボランティア組織のリーダー層を主要な対象とし、社会人と学部学生が共に学ぶシステムをもっている。

開講科目は「社会とボランティア」「ボランティアマネジメント」「福祉情報・調査演習」「ボランティア活動支援演習」と「インターンシップ（12 日 90 時間）」の 5 科目となっている。その上、8,000 字以上の修了論文の提出をして初めて、プログラム修了証が渡されている。インターンシップと修了論文は、立命館大学ボランティアコーディネーター養成プログラムのオリジナルカリキュラムであり、この教育プログラムの中核でもある。

本プログラム修了者には「全国ボランティア活動振興センターが定め、立命館大学産業社会学部と京都市社会福祉協議会が実施したプログラムを修了したことを証す」という修了証が発行される。ボランティアコーディネーターの資格認定書ではないが、唯一の全国的な「認定」に準ずるプログラムである。

第二節． ボランティアコーディネーターの発展の略歴と役割

1999 年の『ボランティアコーディネーター白書』によると、1970 年に大阪で発足した「病院ボランティア連絡会」（1974 年に病院ボランティア協会に改称）では、アメリカの病院ボランティアの活動を参考にすることで、ボラ

ンティアコーディネーターという存在の重要性を感じていった。それに影響を受けて、1976年に大阪ボランティア協会が「第1期コーディネーター養成講座」を開催し、公の場に「ボランティアコーディネーター」という言葉が登場した。その後は、1985年の厚生省による「ボラントピア事業」の開始によって、市町村社協のボランティアセンターの増加、ボランティアコーディネーターの増加がはかられた。1993年7月には、同年4月に出された厚生大臣告示の「国民の社会福祉に関する活動への参加を促進するための基本的な指針」(基本指針)に基づいて、中央社会福祉審議会地域福祉分科会より「ボランティア活動の中長期的な振興方策について」という意見具申が発表された。この中で、「ボランティアコーディネーターを3万人」という設置目標が示された。これの実現のために、厚生省は「市区町村ボランティアセンター事業」を、全社協は「ボランティア活動推進7ヵ年プラン」をスタートさせた。そして、1995年1月に起こった阪神・淡路大震災を契機に、ボランティアコーディネーターの必要性が一般の市民に理解されるようになった。同時に、ボランティアコーディネーターの手法と力量を問われることともなった。

全国社会福祉協議会が市区町村社会福祉協議会のボランティアセンターを対象に毎年実施している調査によると、ボランティアコーディネーターの人数は、1989年の段階で1,034人であったものが1998年で2倍以上の2,642人までに上っている。ボランティアセンターの数でも、1989年の段階で、1,275箇所であったものが1998年には2,891箇所にまで上っている。

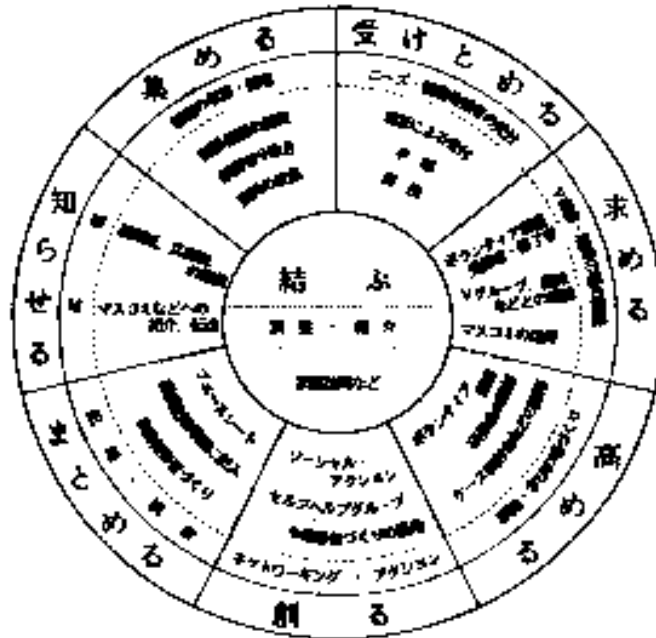
筒井のり子著『ボランティアコーディネーター その理論と実際』を参考にボランティアコーディネーターとは何かをまずは説明をしようと思う。言葉の意味として、coordinateには、「同等の、同位の、同格の、対等の」と「対等な関係を示す」という2つの形容詞の説明がある。一方で、動詞としては「...を同等にする、...を調整する」という意味となっており、名詞であるcoordinatorでは「同等にする人、調整する人」という意味がある。つまり、本書の中では、コーディネーター(Co)が「A」という存在と「B」という存在をコーディネートするということは、「A B」「B A」や「Co A」「Co B」という上下関係を作ることではない。「A」という存在を認め、「B」という存在を認め、そしてその両者を対等の間柄として、適切に

つなぎ、調和していくことが、コーディネートの基本である。もう少し噛み砕くならば、「ボランティアしたい人」と要援助者の「ボランティア（応援）を求める人」を適切に結び付けることであり、臓器移植コーディネーターと似通った点があるとも言える。

しかしながら、ボランティアコーディネーターの役割はこれだけではない。筒井氏は本書の中で、その役割を8つに分類して説明している。（1）受け止める（ニード、活動希望者の受け付けなど）（2）求める（ボランティアの募集、活動の場の調整）（3）結ぶ（調整、紹介）（4）高める（訓練、学びの場作り）（5）創る（ネットワーキング、アクション）（6）まとめる（記録、統計）（7）知らせる（広報）（8）集める（情報収集）である。これらの役割を通して、ボランティアコーディネーターの基本的姿勢（使命）を市民のエンパワメントとして、自発性の援助（市民の参加支援）、協働関係の援助（市民としての成熟支援）、問題の社会化の援助の3点を挙げている。

ここまでボランティア活動の定義については触れてこなかったため、ここで触れたいと思う。まず、ボランティア活動の定義としては、いろいろな定義があり、共通する部分も多くある。東京ボランティア・市民活動センターではボランティアの定義を、自分からすすんで行動する「自主性・主体性」、ともに支え合い、学び合う「社会性・連帯性」、見返りを求めない「無償性・無給性」、よりよい社会をつくる「創造性・開拓性・先駆性」の4つの原則で説明している。私たちが考えるボランティア活動の概念もほぼ同様である。主体的活動、強制されたものではない、自由意志、社会参加、社会参画、非営利性、継続性、公共性、互酬性の7点によって説明しようと思うが、ボランティアそのものを捉えるのであれば、あまり厳密ではなく広がりをもたせた方がいいと考えている。「主体的活動」とは、ボランティアを求めている人に対して活動することも、ボランティアであるという想いを強めるために、自主性は原則から外し、活動をする姿勢を重要視した結果である。「互酬性」については、第三章 第三節 立命館大学生のボランティアイメージモデルのところで、説明することにする。

【図2-1】ボランティア・コーディネーターの8つの役割



出典：筒井のり子著『前掲書』（大阪ボランティア協会）

第三節． スチューデントイニシアチブ科目「企画研究（自主企画研究）」の紹介と研究テーマ

募集要項より抜粋すると『スチューデントイニシアチブ科目（「企画研究（自主企画研究）」）とは学習者自らが「主体的な学びのプロセス」を獲得することが主たる目的である。キーワードは＜問題を探す＞＜科学する＞＜探求する＞＜参加する＞＜自ら学ぶ＞であり、自ら学ぶことで必要な学習の仕方、問題の複雑性や変化に対応する的確な感覚、センス、洞察力を獲得していくこともこの科目の目標である。与えられた課題やテーマを受動的にこなすのではなく、学習者自身が主体的に学習を企画し、対象者と関わりながら学習展開していくことが特徴であり最も重要なポイントである¹⁾』。

第二章． 研究動機

第一節． VCTP 修了学生が企画研究で取り組むまでの経緯

VCTP の受講対象学生が当初は 3 回生以上であったために、修了後は多くの学生が卒業していた。しかし、私たち 3 期生の募集の時は、2 回生以上に対象が広げられたため、修了後も大学にいる学生も多くいる中で、1 期生が創設した Rits VC という修了生フォローアップや受講生も含むネットワークの構築を目的とした自主的な組織はあるものの、実態は社会人を中心とした組織であり、大学に残る学生のフォローアップは課題として残っていた。VCTP で学んだボランティアコーディネートスキルを生かす場所が修了学生には不足していたために、学んできたことを生かす場所として産業社会学部の正課科目である「企画研究」で、フォローアップの研究・実践の場として取り組んでいこうということになった。同時に 2001 年度までの間、VCTP を支援していただいていた(財)麒麟福祉財団と(福)京都市社会福祉協議会、立命館大学産業社会学部により、VCTP 修了後も大学内に残る修了学生のフォローアップを含めた、ボランティアプログラムの臨床研究、ボランティアコーディネーター養成プログラム修了生のフォローアップ「ボランティアスタディセンター(仮称)」の設置の検討、インターンシップの推進、という 3 本柱での研究・教育内容である新たな学術協定事業「ボランティアスキルマッチングエージェンシー(仮称)」の支援を受けながらの研究にもなっている。

第二節． 企画研究 における研究動機と課題そして研究方法

企画研究 における具体的な研究として、ボランティア活動支援の拠点としてのボランティアスタディセンターの設置検討を出発点に研究することにした。しかし、そもそも大学内でボランティアコーディネートが必要であるのかという実態把握をしていなかった。そこで、まずはアンケート形式の調査票を配布することにより、衣笠キャンパスに在籍している 5 学部の学

部学生を中心とした立命館大学生のボランティア活動の実態や意識を把握するための調査を行い、それを踏まえて具体的支援についての調査研究をすることにした。また、調査を実施したもう1つの理由は、一般的に言われているボランティア観やボランティアの定義に違和感があり、ボランティア観や定義が移り変わりつつあるのではないかと感じていたからである。

さらに、研究の視野に入れているボランティアスタディセンターの大学内設置は VCTP 修了学生のフォローアップだけでは意義は乏しく、地域ではない大学という教育の場に設置する意義についての研究にも取り組んでいきたいと考えている。

第三節． ボランティア活動を支援する理由

ボランティア活動を支援する理由として、実態レベルではボランティア(応援)を求める人や施設・団体がいる一方で、ボランティアをしたい人たちがいる現実を踏まえて、それらのニーズをつなぐことであることはまぎれもない事実である。しかしながら、それだけではない。単にニーズをつなぐだけでは、『ボランティア』とはどういう意味をもつものであるのかが考えられていない上に、ただの奉仕活動・社会体験活動にとどまってしまうこともある。実際に、1960年代に唱えられた「1億総ボランティア」の考えは、今日まで注目されてきている考えである。日本公共広告機構のCMで扱われているように『ちょボラ』というのが、その典型である。この考えについては、さまざまな異論が出されているがここでは触れないでおきたい。とは言え、もっと多くの人たちがボランティアを身近に感じ、活動へと結び付けられるボランティアのバリアフリー化も、ボランティアコーディネーターの役割の1つであると考えている。

その理由として、李妍 著『ボランティア活動の成立と展開』より、「ボランティアの生活化の真意は、決して全ての人がボランティアをすべきだと主張するものではなく、むしろ、ボランタリー活動を自分自身の私的生活の一部として、あるいは私的生活のごときに捉えて、そのような私的生活を営む中で自然に公共的生活を自らの中で実現していくことにある。²⁾」というのが、私たちがボランティアを支援する目的の一つであり、端的に表してい

る。もう1点としては、日常生活では潜在していたとしても、社会で何らかの必要性が生み出されたとき、例を挙げれば、阪神・淡路大震災で活躍したボランティアのように、行政を含めた公共性・公益性のある活動を求められる団体では手を出せない細部への支援などが、自然な形でできるような人間教育の一環として、支援する必要性を考えている。また、公的には目を向けられていないさまざまな問題にいち早く着手し、それを公的な制度による支援に結び付けていけるような市民運動などへとつなぐ役割を担えるような環境整備や市民育成などを日常生活の中で生み出すことも目的としている。

私たちがボランティア活動を支援する理由　ボランティア活動が目指すものは、『希薄になりつつある人間関係を、ボランティア活動を通して紡ぎ直していく』『ボランティア活動を個人の中に留めず、他者や社会との関係性の中の活動であると認識できるようにフォローアップする』『「個人と個人」「個人と団体」「個人と社会」「団体と団体」「団体と社会」などを繋ぐことにより、ボランティア活動のもつ可能性を高める』『主体的に様々な活動をしている人たちを応援していくことを通して、魅力ある社会を共に創造していく』の4本柱である。

ボランティア活動の担い手として、李氏は創発型リーダー・調整型リーダー・中心メンバー・協力メンバーの4つに類型化している。創発型は、自ら活動を起こしたり、ボランティアグループに重大な変革をもたらす人。調整型は、ボランティアグループにおけるメンバー間の協調関係を図る人。中心メンバーは、相対的にボランティア活動に時間を多く費やす人。協力メンバーは、活動に興味はあるが、それ以外の活動や生活を大切に人。こういったさまざまなタイプの活動に合わせた支援をしていきたいが、ここではこれに即した形での支援方法の提案ではなく、ボランティア活動に対する関心と活動の結びつきというテーマで考えたい。そして、それらを実現させられる体制とともに考えてみたい。

第三章． 実態調査分析の概要

- 1．ボランティア活動に関する意識・実態調査（個人を対象）
- 2．ボランティア活動に関する意識・実態調査（サークル、クラブを対象）
- 3．ボランティア関連科目調査

第一節． 個人を対象にした調査の概要

1．調査目的

立命館大学に在籍する学部学生の、ボランティアに関する意識や活動実態を把握し、ボランティア活動の具体的支援と、それを実施するボランティアセンター設立の指針の参考資料とするため。

2．調査対象

立命館大学学部学生（衣笠キャンパス）

調査は6月24日から7月7日の2週間で実施し、各学部各回生小集団クラス（基礎演習、研究入門、演習、卒業研究、語学など）から無作為に1クラスずつ抽出し、調査票を配布、回収した。（ただし、4回生は小集団講義が十分に機能していない学部もあるため、個人的に配布、回収をした学部もある。）補足的に院生、教職員、立命館生協職員にも調査を行ったが、回答者数が少数のため、今回は分析対象から外すことにした。

3．回収結果

回答者数：397 サンプル

分析対象者数：392 サンプル

第二節． 意識・実態調査分析 生活実態調査（基本属性）

1．学部

学 部 (単位=人)				
政策	国関	文	法	産社
49	33	98	75	136

2．回生

回 生 (単位=人)				
5回生以上	4回生	3回生	2回生	1回生
2	48	84	143	109

3．年齢

年 齢 (単位=人)			
28歳以上	24-27歳	20-23歳	19歳以下
30	12	175	173

4．性別

性 別 (単位=人)	
女性	男性
235	156

各設問の分析を財団法人内外学生センター（以下では全国と表記する）が平成9年12月に全国98大学在学学生を対象に、各大学の学生課などを窓口として配布・回収して行った「学生のボランティア活動に関する調査」と比較しながら行った。

1．調査母集団

全国98大学在学学生（国立22大学、公立4大学、私立72大学）

2．サンプル数 / 有効回収数（率）

10,000 サンプル / 7,225 サンプル（72.3%）

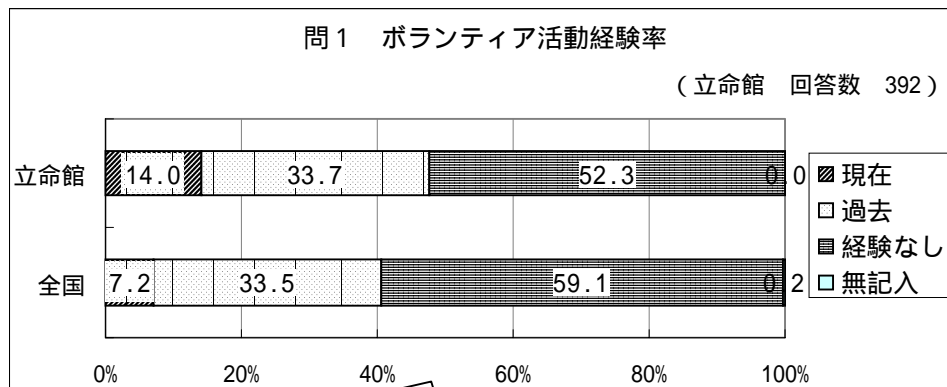
3．抽出方法

2段階無作為抽出

第三節． 意識・実態調査分析 ボランティア意識調査

1．ボランティア活動経験（問1）

ボランティア活動経験数（単位＝人）				
	現在	過去	経験なし	無記入
立命館	55	132	205	0
全国	520	2420	4270	14



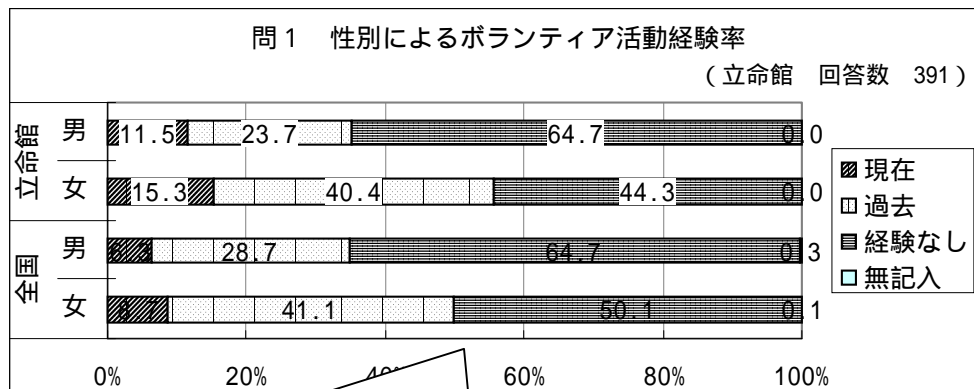
立命館は「現在している」14.0%（55人）、「過去にしていた」33.7%（132人）、「経験なし」52.3%（205人）。半数以上がボランティア活動を経験している（47.7%、187人）。（現在＋過去）

全国は「現在している」7.2%（520人）であり、立命館の学生の「現在している」割合が全国と比べて高いことが分かる。

現在までの経験ではあまり差がないにも関わらず、現在ボランティア活動をしている人が全国平均よりも高いことは、立命館大学では課外活動がしやすい環境にある、それが校風となり活動的な学生が集まりやすいということが言えるのではないだろうか。

2. 性別によるボランティア活動経験（問1）

立命館	性別によるボランティア活動経験数（単位＝人）			
		現在	過去	経験なし
男		18	37	101
女		36	95	104



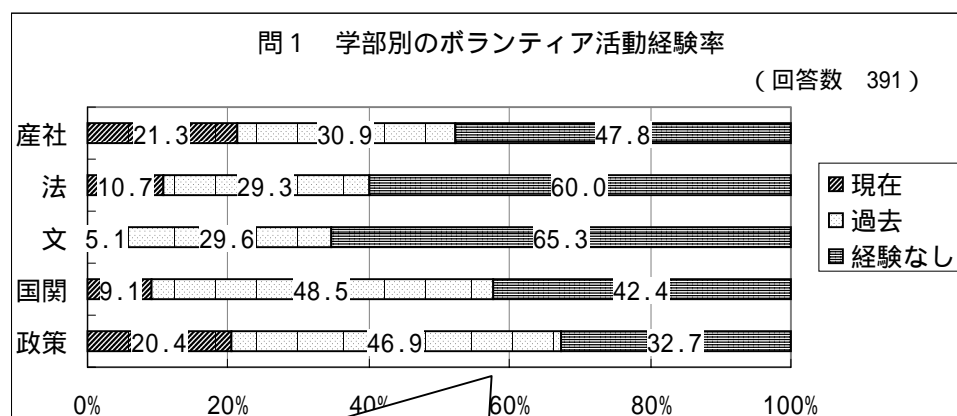
性別で見ると、「現在」女性 15.3%（36人）、男性 11.5%（18人）、女性の方が「現在」の割合が少し高く、女性の過半数は経験している。

全国は「現在」女性 8.7%、男性 6.3%であり、性別で見ても全国より割合が高い。

非常に身近な活動は女性の役割であり、男性がやるのは恥ずかしい（女々しい）活動である一方、男性が社会（世の中）を作っているなどの意識から、女性に比べて男性の方が大きな活動に興味関心が向かいやすいという、ジェンダーによる性別役割が無意識的にあるのかもしれない。しかし学生ではあまり社会的なジェンダーを感じていないにもかかわらず、学生レベルで男女間にこれほど経験の差が出ているのはなぜだろうか？

3. 学部別によるボランティア活動経験（問1）

	現在	過去	経験なし
産社	29	42	65
法	8	22	45
文	5	29	64
国関	3	16	14
政策	10	23	16



「ボランティアを経験している」割合は、政策科学部、国際関係学部、産業社会学部の順で多い。「現在している」人は、産業社会学部、政策科学部が多い。

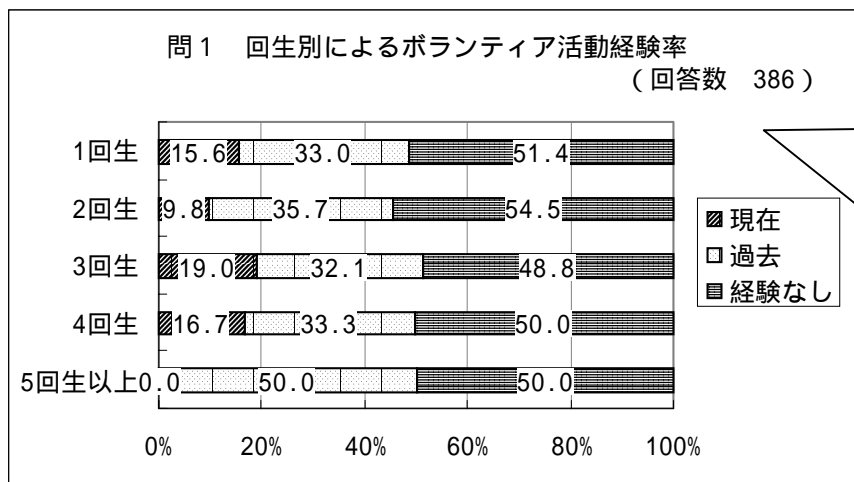
全国では、ボランティア活動が大学の専攻と関連が「ある」と答えたのは20%、「少しある」16%、「ない」61%。ただし、社会福祉学系では「ある」70%、教育学系は50%が「ある」と答え、高い割合となっている。

周囲の環境、つまりボランティア活動をしている先輩や同級生の割合の高さ、(1回生においては入学する段階で) 学部、活動のきっかけが知人からという人が多いこと、は関連があるのではないだろうか。(特に立命館の特徴として、1回生基礎演習をサポートするエンター・オリター制度がある。)

また、専攻分野と活動(興味のある)分野が類似していることは、ボランティア活動がしやすい環境にあるのではないだろうか。さらに、集団心理として周りでボランティア活動をしている人が多いと、それが少ない環境に比べて、ボランティア活動がしやすい環境にあるのではないだろうか。

4. 回生別によるボランティア活動経験（問1）

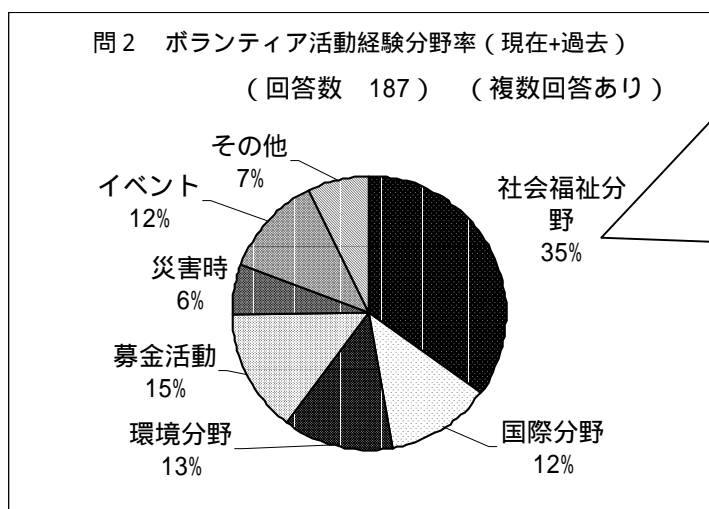
	1回生	2回生	3回生	4回生	5回生以上
現在	17	14	16	8	0
過去	36	51	27	16	1
経験なし	56	78	41	24	1



「現在している」のは2回生だけやや低くなっているが、あとは特に差は見られない。

5. これまでのボランティア活動経験分野（問2）

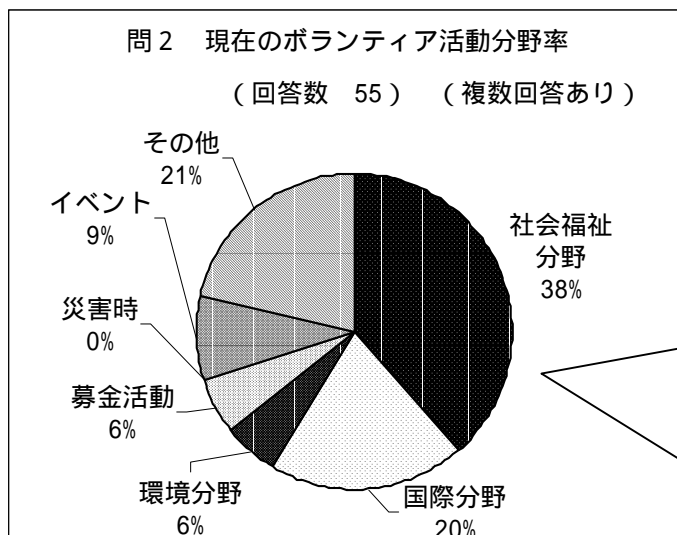
社会福祉分野	国際分野	環境分野	募金活動	災害時	イベント	その他
109	39	41	46	19	37	23



社会福祉分野での活動が最も多い。それは産業社会学部生が多いからかもしれないが、ボランティアと社会福祉分野は密接な関係にあるのではないかと考える。(問15のボランティア活動のイメージに、具体的に「福祉」と回答している人も数人いた。)

6. 現在のボランティア活動分野（問2）

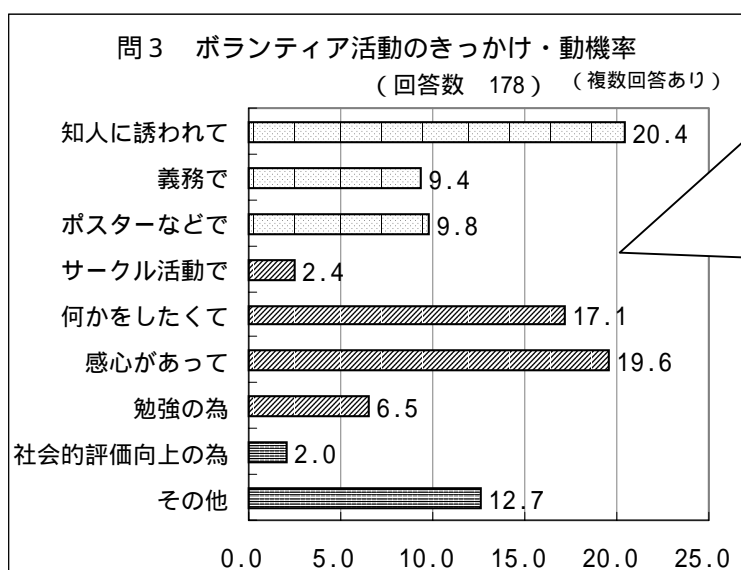
現在のボランティア活動経験分野 (複数回答あり) (単位=人)						
社会福祉分野	国際分野	環境分野	募金活動	災害時	イベント	その他
27	14	4	4	0	6	15



上記グラフの「経験している」分野の割合とほぼ同じであるが、国際分野は「現在している」割合が増える。国際分野は、「今後やってみたい活動分野」としてもポイントが高く、大学入学後に興味をもつ分野なのだと考えられる。

7. ボランティア活動のきっかけ・動機（問3）

ボランティア活動のきっかけ・動機 (複数回答あり) (単位=人)				
知人に誘われて	義務で	ポスターなどで	サークル活動で	その他
50	23	24	6	31
何かをしたくて	感心があって	勉強の為	社会的評価向上の為	
42	48	16	5	



きっかけとしては「知人に誘われて」が多く、動機としては「関心があって」「何かをしたくて」が多い。人との関係が少なからずきっかけ・動機に影響を及ぼしているのではないだろうか。

8. ボランティア活動を続けている理由 - 自由記述 (問4)

活動がおもしろい、楽しい

自分にプラスになる、情報・知識が得られる、勉強になる

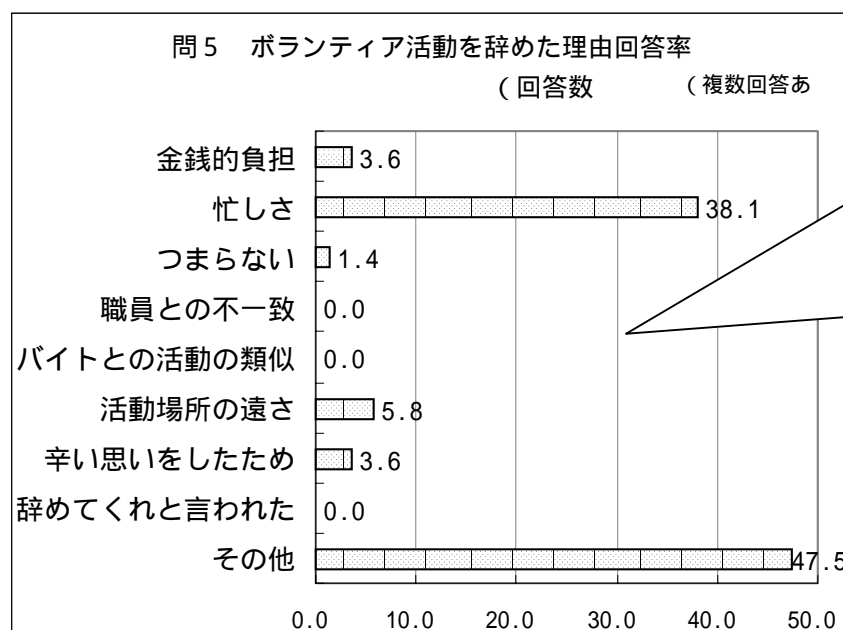
人との出会い、交流、人間関係、つながり

生きがい、使命感

何かしら自分にとってプラスになったり、得るものがあったりするために続ける人が多い。問 15 ボランティア活動イメージと連動すると考えている。

9. ボランティア活動をやめた理由 (問5)

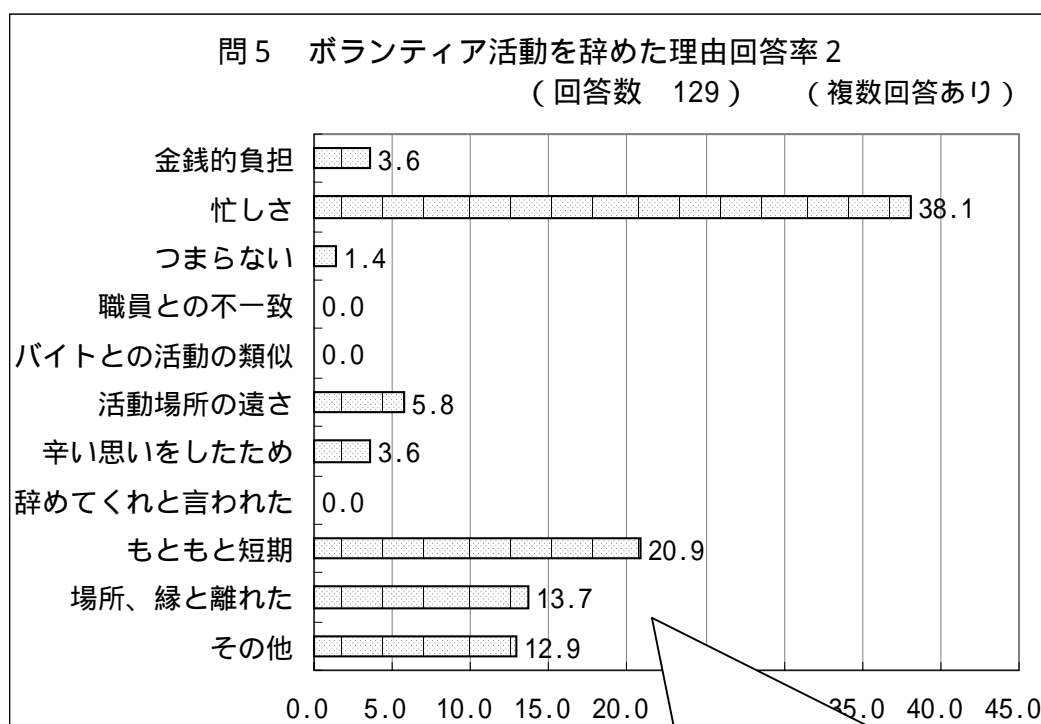
ボランティア活動を辞めた理由 (複数回答あり) (単位=人)				
金銭的負担	忙しさ	つまらない	職員との不一致	バイトとの活動類似
5	53	2	0	0
活動場所の遠さ	辛い思いをした	辞めてくれと言われた	その他	
8	5	0	66	



「その他」の理由で
「もともと短期、期間
限定だった」19人
「小、中、高校、海外、
地元、など活動してい
た場所、縁と離れてし
まったため」29人。

10. 「その他」の中の項目を独立させたグラフ（問5）

ボランティア活動を辞めた理由 (複数回答あり) (単位=人)				
金銭的負担	忙しさ	つまらない	職員との不一致	バイトとの活動の類似
5	53	2	0	0
活動場所の遠さ	辛い思いをした	辞めてくれと言われた	もともと短期	場所、縁と離れた
8	5	0	29	19
その他				
	18			

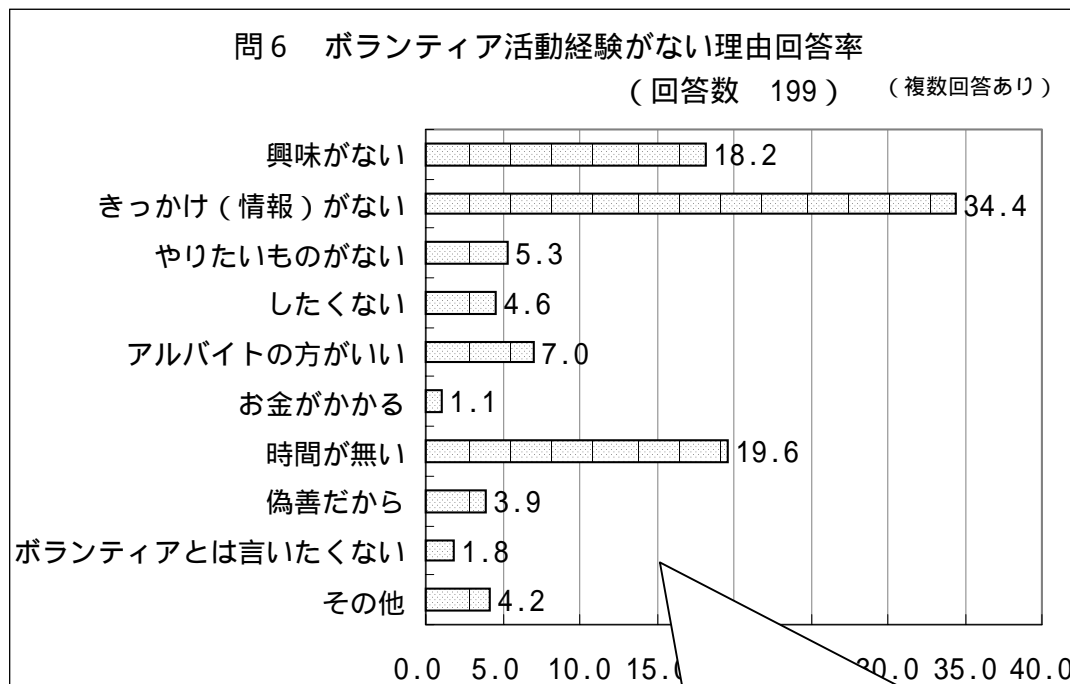


「忙しい」が圧倒的に多い。それは、そのボランティア活動が忙しいのか、他にもやることがあり生活が忙しいのか、ここからは分からない。

「もともと期間限定」「場所、縁と離れた」は故意にやめたわけではなく、興味がないわけではないと思われる人たち。今後こういう人たちが活動を再開しやすいように支援する必要がある。

11. ボランティア活動経験がない理由（問6）

ボランティア活動経験がない理由 (複数回答あり) (単位=人)					
興味が無い	きっかけ(情報)が無い	やりたいものがない	したくない	アルバイトの方がいい	その他
52	98	15	13	20	
お金がかかる	時間が無い	偽善だから	ボランティアと言いたくない	その他	
3	56	11	5	12	



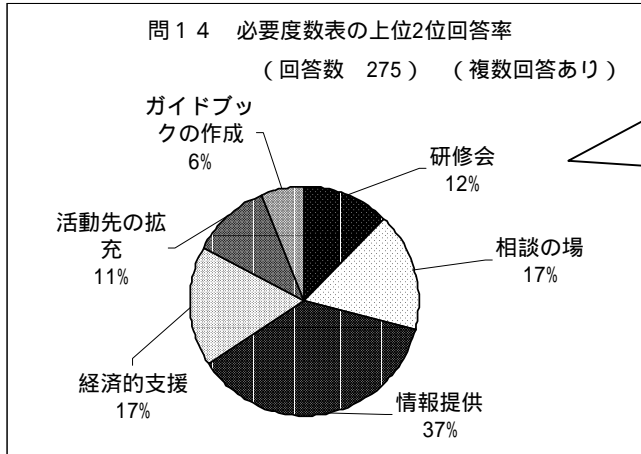
「きっかけが無い」33.6%が最も多く、「時間が無い」19.2%、「興味が無い」17.8%が続く。

全国では(全く同じ設問ではないが似たようなところで)「大学の時間が忙しい」53%、「活動に要する技術、知識がない」46%、「情報が不足している」43%、「活動資金がない」38%となっている。

「きっかけが無い」と答えていることから、少なからずは関心をもっているのだろう。「きっかけ(情報)がない」「やりたいものがない」人へのサポート、「興味がない」「アルバイトの方がいい」人へのアプローチを考えていく必要がある。

12. ボランティア活動をする上で必要と思う支援（問14）

必要度数表の上位2つ (2つ回答) (単位=人)					
研修会	相談の場	情報提供	経済的支援	活動先の拡充	ガイドブックの作成
66	91	201	92	61	33



「情報提供」の必要度が最も高い。次に、「経済的支援」「相談の場」が続く。

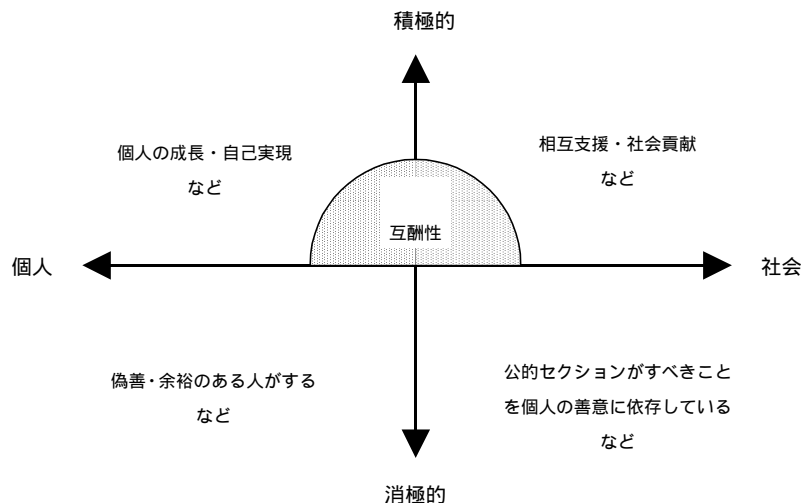
状況に応じた適切な情報提供や支援をしていく必要がある。

13. ボランティア、ボランティア活動のイメージ（問15）

調査票では自由記述形式で答えてもらっている。

まずは、「プラス」「マイナス」で分類しようと試みたが、判断が難しい回答もあり、ボランティア、ボランティア活動に対する「積極的」「消極的」という度合いで分類することにした。さらに見ていくと、「ボランティア活動をする人、個人（自分自身）について」「社会的な意味や意義について」答えているもの、この大まかな傾向があることに気付き分類することにした。

立命館大学生のボランティアイメージモデル



14 . 立命館大学生のボランティアイメージモデルに対応したコメントの分類表 (問 15)

<p>積極的 個人</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 出会いがある ・ 自分のためになる 自己実現 ・ 成長できる ・ 視野が広がる ・ 良い経験 普段得られないこと ・ 社会と関わる機会 社会を知る ・ 勉強になる ・ いきいき 活発 ・ 楽しい ・ 感動できる ・ やりがいがある 達成感 ・ 一生懸命 積極的 	<p>積極的 社会</p> <ul style="list-style-type: none"> - A 相互支援 ・ 人助け ・ 支えあい 助け合い ・ 人の役に立つことができる ・ 地域交流を促進 ・ みんなで一つのことをやり遂げる ・ みんなと一緒に楽しめる - B 社会貢献 ・ 社会貢献 地域のために働く ・ 社会変化の原動力 ・ 世界平和 ・ 社会に必要なもの
<p>積極的 社会 個人 (互酬性)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 他人の為の活動が自分の喜びになる ・ 一方的に与えるというより相互にプラスになる 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 皆が良い生活を営むためにあるとよい ・ 個々の人間が持っている様々な能力を出し合って他の人を援助するための社会参加
<p>消極的 個人</p> <ul style="list-style-type: none"> - A ボランティアそのものに対して否定的 ・ 暗い ・ 固い ・ 弱い ・ 大変 ・ 忙しい 時間が必要 ・ 偽善 ・ 始めにくい とっつきにくい 	<ul style="list-style-type: none"> - C ・ 意識を向上させることができればボランティアの環境もよくなる ・ それが当然の社会になれば ・ 人の奉仕心を育み刺激するもの ・ 人間関係や、人間の存在そのものの大切さ、尊さを実感する機会を提共するもの

- ・自己満足
- ・何らかの利益がないとやらない
 - B ボランティアを美化している
- ・自分のこと、目標を達成してからやるもの
- ・目的意識をもってやるもの
- ・自分をしっかり持つ人がやる
- ・時間、精神的に余裕のある人がする
- ・優しい人がする
- ・好きでないとできない

消極的 社会

- ・公的セクションが支援すべき問題を個人の善意に依存している
- ・特別な活動
- ・特定の政党による政治活動の担

15 . 立命館大学生のボランティアイメージモデルの説明 (問 15)

の「積極的 個人」には、自分自身への影響である「出会いがある」「自分のためになる 自己実現」「成長できる」や、ボランティアする人をイメージする「いきいき 活発」「一生懸命 積極的」をあてはめた。

の「積極的 社会」には、ボランティア活動をすることによって、自分自身だけへの影響ではなく、相手にとってもよい影響があったり、変化があったり、さらに両者の関係だけでなく地域・社会への影響があると考えているものをあてはめた。特に、 - Aは、困ったときはお互いに協力し、助け合おうという関係で捉えているものを「相互支援」とまとめ、 - Bはボランティアを通して社会参加をする、社会を変えていくととらえているものを「社会貢献」とまとめた。

「積極的 社会 個人 (互酬性)」は「他人の為の活動が自分の喜びになる」「一方的に与えるというより相互にプラスになる」というように、ボランティア活動をすることによって、活動そのものが他者や社会に対して影響を与えるのと同時に、自分自身にも影響があるというものをまとめた。

- A「相互支援」とは、影響を与える時間の差や関係の違いにより、区別した。

「消極的 個人」には、個人への影響である「忙しい」「大変」「始めにくい」や、ボランティアする人の条件を言うような「時間、精神的に余裕の

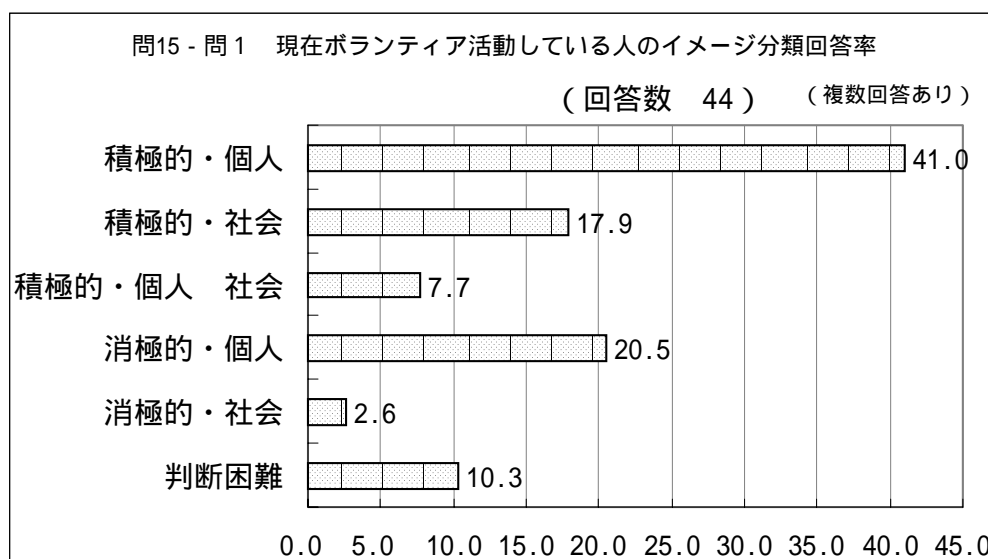
ある人がする」「好きでないとできない」をあてはめた。 - Aは、ボランティアそのものに対して否定的であり、 - Bはボランティアを美化し、そのために「ボランティアはすごいことだから自分には関係ない」というイメージを持っていると考えられる。

「消極的 社会」には「公的セクションが支援すべき問題を個人の善意に依存している」「特定の政党による政治活動の担い手」をまとめた。

16 . 現在ボランティア活動をしている人のイメージモデルの分類 (問15 - 1)

ボランティア活動の経験によって、ボランティアに対するイメージが変わるのではないかと思い、経験別に調べてみることにした。

ボランティアイメージと活動経験 - 現在ボランティア活動をしている人 - (1つ回答) (単位=人)					
積極的・個人	積極的・社会	積極的・個人-社会	消極的・個人	消極的・社会	判断困難
16	7	3	8	1	4

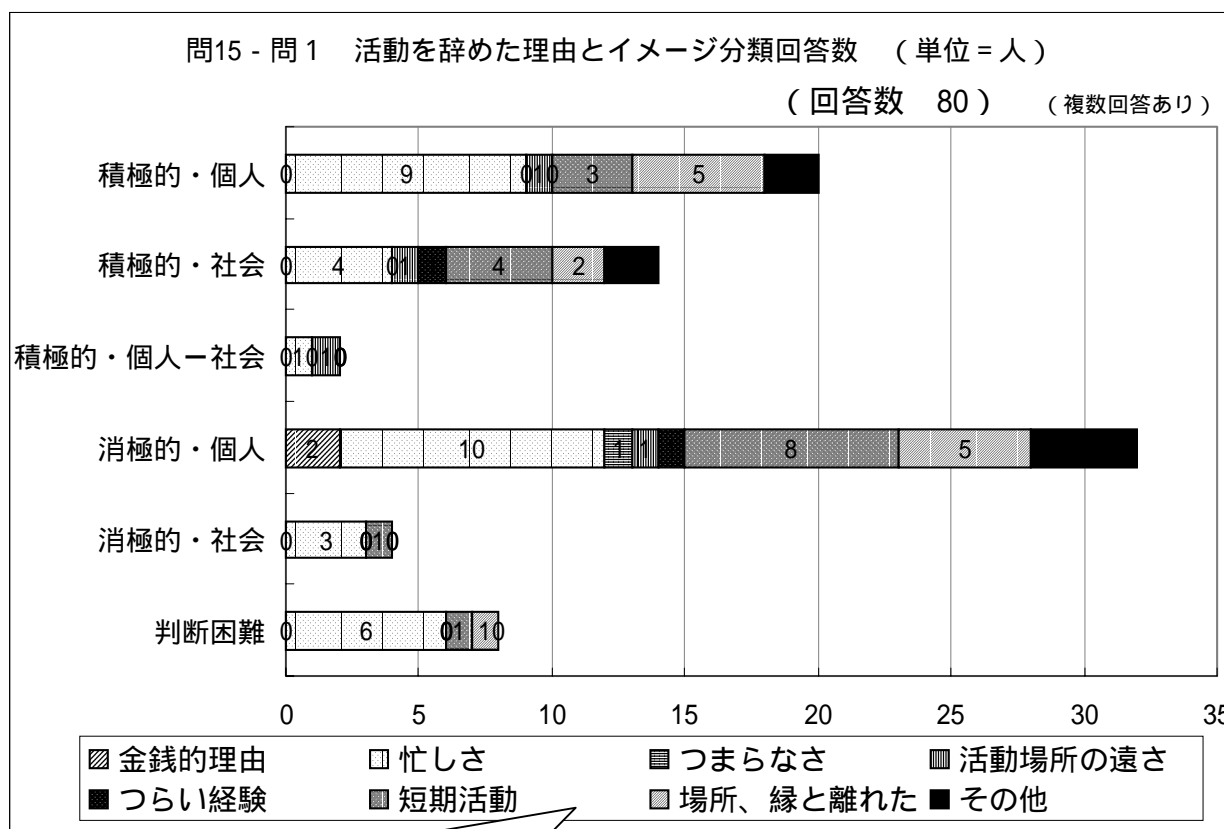


全体的に積極的イメージをもつ人は4割を超えている。とりわけ、「積極的・個人」のイメージをもつ人が多い。
一方で、「消極的・個人」のイメージをもっている人も、少なからずいるが、何が原因なのかを探る必要がある。

17. 過去にボランティア活動を経験していた人のイメージモデルの分類 (問1 - 15)

ここでは、活動を辞めた理由で分類し、イメージとの関連性を見ることにした。

	積極的・個人	積極的・社会	積極的・個人-社会	消極的・個人	消極的・社会	判断困難	合計
金銭的理由	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	100.0
忙しさ	27.3	12.1	3.0	30.3	9.1	18.2	100.0
つまらなさ	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	100.0
活動場所の遠さ	25.0	25.0	25.0	25.0	0.0	0.0	100.0
つらい経験	0.0	50.0	0.0	50.0	0.0	0.0	100.0
短期活動	17.6	23.5	0.0	47.1	5.9	5.9	100.0
場所、縁と離れた	38.5	15.4	0.0	38.5	0.0	7.7	100.0
その他	25.0	25.0	0.0	50.0	0.0	0.0	100.0

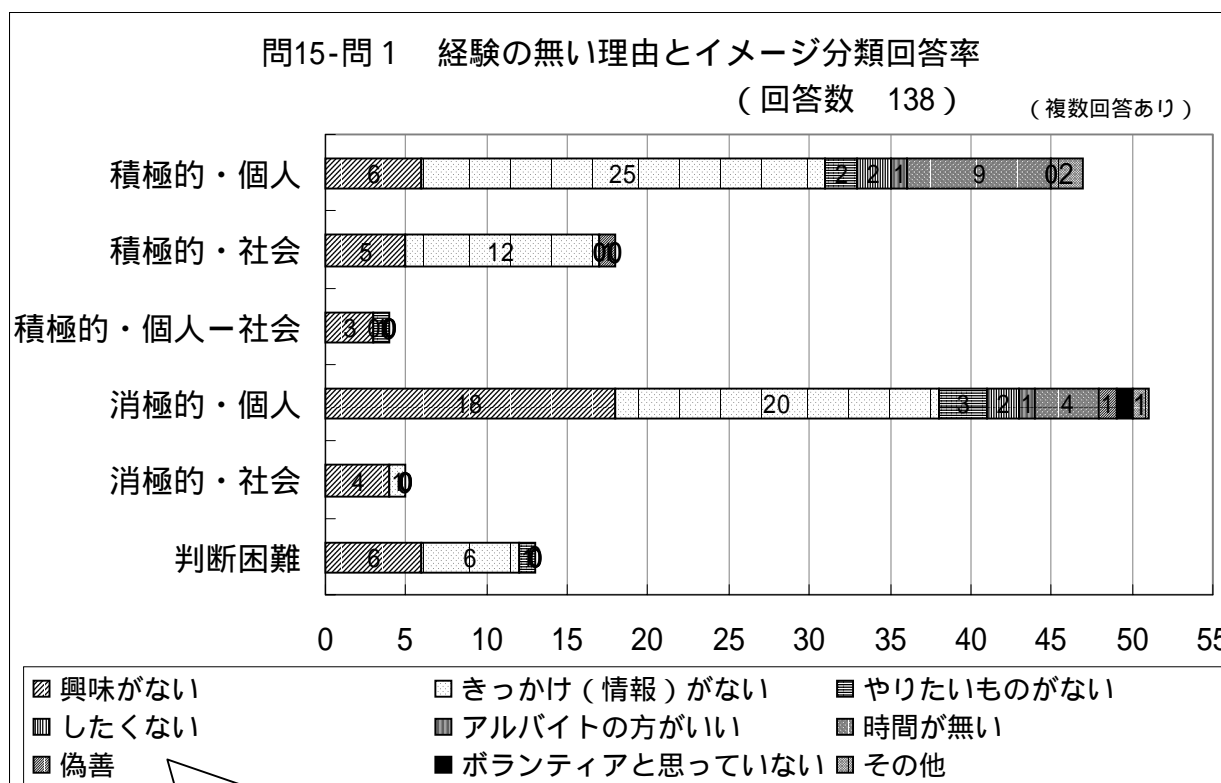


「消極的・個人」のイメージをもつ人が多いが、積極的・消極的の二分類で考えると、ほぼ同数となっている。

短期ボランティア経験者では、「消極的・個人」のイメージをもつ人が多い。場所を離れて活動を辞めた人は、積極的・消極的の二つに分かれている。

18 .ボランティア活動の経験が無い人のイメージモデルの分類(問1 - 15)
 ここでは、経験の無い理由で分類し、イメージとの関連性を見ることにした。

	積極的・個人	積極的・社会	積極的・個人-社会	消極的・個人	消極的・社会	判断困難	合計
興味がない	14.3	11.9	7.1	42.9	9.5	14.3	100.0
きっかけ(情報)がない	39.1	18.8	0.0	31.3	1.6	9.4	100.0
やりたいものがない	28.6	0.0	14.3	42.9	0.0	14.3	100.0
したくない	50.0	0.0	0.0	50.0	0.0	0.0	100.0
アルバイトの方がいい	50.0	0.0	0.0	50.0	0.0	0.0	100.0
時間が無い	69.2	0.0	0.0	30.8	0.0	0.0	100.0
偽善	0.0	50.0	0.0	50.0	0.0	0.0	100.0
ボランティアとっていない	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	100.0
その他	66.7	0.0	0.0	33.3	0.0	0.0	100.0



「消極的・個人」、「積極的・個人」の二つに割れている。
 ボランティアに興味が無い人は、「消極的・個人」のイメージをもっている人が多い。
 積極的・消極的の二分類で考えると、ほぼ同数となっている。

19. ボランティア活動経験とボランティアイメージ（問1 - 15）

全体的に、ボランティア活動のイメージは、「個人 > 社会」となっている。積極的・消極的で見ると、あまり差は無くほぼ同数になっている。

前述9.の「問5 ボランティア活動を辞めた理由」の分析で、『「もともと期間限定」「場所、縁を離れた」は故意に辞めたわけではないので、興味がないわけではないと思われる人たち。今後こういう人たちが活動を再開しやすいように支援する必要がある』と分析したが、理由別に見ると推測とは異なる結果が出た。短期のボランティア活動では、ボランティア活動の本当の魅力を感じる前に、辞めてしまっているのではないかと考えられる。

第四節. サークル・クラブによるボランティア関連活動

直接、サークル・クラブの部室等へ伺って、ボランティア・ボランティアな活動をしているのかを確認した上で、聞き取りを行った。

1. 現在ボランティア活動、ボランティアな活動をしているサークル

サークル名	本来の活動	ボランティア・ボランティアな活動
陶芸部	陶芸	8年前から岩倉病院の作業療法室で陶芸をしている患者さんにリハビリのお手伝いをしている。ボランティアには交通費として500円が支給される。ボランティア保険に加入している。代々先輩から受け継がれている。
落語研究会	落語公演 学術的アプローチ おはやし等	老人ホームや催し物の際の落語公演。毎年依頼があり、年間160回にものぼる。衣笠・BKCともに周辺地域で活動。
古美術研究会	文化財に関する研究と見学会	貴重な文化財の保護パトロールと拝観者への文化財の解説。古美術連連盟に依頼が来る。一人一日5,000円（交通費、昼食費込み）をお礼として受け取る。昭和40年から代々受け継がれている。

朝鮮文化研究会	朝鮮語と朝鮮半島の歴史研究	障害を持った在日朝鮮人男性の無年金裁判の支援をしている。 2ヶ月に一回程行われる裁判の傍聴、講演会の開催。
環境サークルスーニャ (リサイクル市 実行委員会)	ゴミ問題、ペットボトルのリユース、田舎づくり、エコキャンパスづくり、グリーンコンシューマー、学園祭(ゴミ分別、容器)	ゴミ0(5月30日)運動

2. 過去にボランティア活動、ボランタリーな活動をしていたサークル

サークル名	本来の活動	ボランティア・ボランタリーな活動
競技ダンス部	練習会、各大会運営、イベント	依頼があったときのみダンスのデモンストラーションを行う。
BALUT (バロット)	フェアトレード、開発教育、スタディツアー	スタディツアー参加者の募集
体育会ボート部	全国大会優勝を目指し、チームの統一をはかる	年に一回琵琶湖レガッタというイベントをボート部主催で開催。 大学生と地域住民の交流の場となっている。 これからはこれをもっと大きなイベントにして、大学や地域に働きかけたい。

3. 考察

16サークルにヒアリングした中で、8サークルが本来の活動以外にボランタリーな活動を行っていることが分かった。また、ボランタリーな活動の内容は、サークル本来の活動内容を生かしたものとなっている。ボランタリーな活動を行っているサークルを見ると、定期的に活動を行うサークルと、依頼があったときのみ活動を行うサークルとに分けられる。依頼が毎年恒例と

なっていたり、代々先輩から受け継がれているサークルもあり、ボランティアな活動がそのサークルにとってサークル活動の一部となっているところもある。なかには、ボランティアな活動への参加者の不足に悩むサークルもあり、どのように参加者を増やしていくのか、その活動の魅力をいかにしてサークルの他のメンバーに伝えていくかが、サークルの課題となっているようである。

ボランティアな活動を行っていないサークルのその主な理由としては、「興味がない」「本来の活動が忙しく、余裕がない」「お金がかかる（例 邦楽部：楽器の運搬の際に費用がかかる）」などが挙げられた。なかには、サークルとしてはボランティアな活動に参加していないが、個人的にサークルの活動内容を生かしたボランティアに参加しているメンバーはいる、といったサークルもあった。

今回、ヒアリングを行ったサークル・クラブは、ほんの一例である。実際には、もっと多くのサークル・クラブがボランティアな活動に取り組んでいると思われる。今後、ボランティアな活動をするサークルでは、そのサークルが行うボランティア活動とそのボランティア活動が果たす役割を結び付けたり、見出していく方法を探ったりする必要がある。

第五節．立命館大学(衣笠キャンパス)におけるボランティア関連科目

全学部のシラバスより、ボランティアに関する講義内容をもつ科目を取り上げた。

1．産業社会学部

科目名	講義内容
非営利組織論	NPO・NGO はどのようなサービスの特徴を持っているのかを考察する。
国際ボランティア論	「NGO の時代」といわれる 21 世紀のなかで、組織の活動、課題を検証していく。
地域福祉論	現実の地域福祉プログラムの臨床研究を通して、「地域福祉」とは何かに迫ってみる。

特殊講義	事例をいくつか考察しながら、非営利組織の未来、市民のあり方に想いをめぐらしながら、自分自身の経験ともつきあわせてみる。
人間と文化	文化現象を文化交流、文化形成、文化表現の3つに分けての講義。文化形成では、現代若者論、ボランティアの国際比較調査を取りあげ、ボランティアと若者の能動的な文化形成、多文化共生社会の可能性を探求する。
人間福祉特論	基本文献を読解し、その後、参加者と社会調査（面接調査およびフィールド調査）に挑戦し、日本における「ボランティア社会」の行方を検討する。
フィランソロピー論	仕事でボランティアの世界に入ったのが事の始まり。会社人間OBが語る異説・企業等の社会貢献論。
ボランティアと社会参加研究	NPO や福祉施設等にとっては職員（有給）だけでなく、ボランティアも重要な存在である。しかし多くの組織では、ボランティアを有効に活用しているとはいえない。昨年出版されたテキストを輪読しながらブレインストーミングを行なう。
ライフデザイン論（人間発達論）	ライフデザインに関する社会学的概念をもとにして、人間の生き方や他者との関わり方が変容する時代の「A WAY OF LIFE」の諸相を明確にする。
ボランティア関連科目かどうかの判断困難科目	
参加のデザイン論（市民参加論）	環境創造（まちづくり）活動における住民参加・住民主体の事例を紹介しつつ、「参加」の意味や成立要件、行政や住民の役割などについて考えていく。
自治と参加	グローバル化が進行する中での自治と参加の関係や意味を、われわれが政治や社会にいかに関わっていけば良いのかという観点から、歴史的・比較論的に考察する。

2. 国際関係学部

科目名	講義内容
社会開発論	自己目的化した経済成長ではなく発展・開発を人間の生活中心に考えようと試みる社会発展・開発の考え方について学ぶ。住民組織の果たす役割や NGO の機能、ジェンダーのもつ意味などに注目する。
特殊講義 (国際文化理解部門)	まず旧来型の「開発」がもたらしてきた問題点を具体的な事例から考察していく。「社会開発」を推進する主要な担い手としての NGO について実践的に学んでいく。

3. 政策科学部

科目名	講義内容
組織論、組織過程論	企業、大学、病院、行政組織、NPO など、社会には、様々な組織があり、それらの組織は、社会における様々な問題に直面している。組織の動態とそれをどう動かしていくかについての理論を学ぶ必要がある。
非営利組織論	事例をいくつか考察しながら、非営利組織の未来、市民のあり方に思いをめぐらし、自分自身の経験などともつきあわせてみよう。
ボランティア関連科目かどうかの判断困難科目	
市民参加 市民参加論	なぜ今「市民参加」なのか、ということを考えることから始まり、単なる理念としての「参加」ではなく、社会のシステムとしての確立の必要性和、その実践の仕方を明らかにする。

4 . 文学部

科目名	講義内容
環境心理学	環境心理学とは、物理的な環境と人間の行動・意識的経験とのあいだの相互作用に関する心理学である。この相互作用という点が大切であり、物理的なセッティングが、我々の行動に影響を与えるだけでなく、個々人の活動が環境に影響を与える様子を解説することにする。
インターンシップ LAクラス	京都府井手町におけるインターンシップ。町において地理学・歴史学・伝承学などの知識と方法を駆使して地域文化研究のフィールドワークを行い、それにもとづいて歴史・文化の視点からの町づくりへの提言を含む報告書を作成してゆく。
LBクラス	映像番組制作インターンシップ。
LCクラス	東映太秦映画村インターンシップ。
LD、LEクラス	NPO「ふらっと」とのインターンシップ。
LFクラス	舞鶴市の赤レンガフェスティバル期間中に開催される「丹後地方の伝説」に関わる浮世絵や文学資料を中心とした展示会の準備に参加し、文化財の取扱実習や、展示実習、WEB を利用した文化情報発信手法を学ぶ。

< 考察 >

一見、ボランティアと関係がなさそうな科目でも、ボランティア活動を取り入れていることから、ボランティア活動の必要性や重要性が様々な分野で考えられ、求められているように感じる。

第四章． 自由面接法によるヒアリングから見る

具体的支援策

ボランティア活動に対する関心と活動の結び付き

ここでは、前項の意識・実態調査の中から、生まれた課題や疑問点などを、自由面接法による調査でより具体的かつ詳細なヒアリングを9名に対して行うことで明らかにしていくこととなった。ここで掲げたケースは、主にボランティア活動未経験者が調査の中からハードルとして感じられているものに対して、それを乗り越えてきた経験者の活動から支援方法をいくつか提言していきたいと考えている。

第一節． ボランティア活動経験のきっかけの差

(問6 ボランティア活動がない理由より)

想いを活動に結び付けられた成功ケースの考察から
ボランティア活動はしたいと思っているが、活動するきっかけがないケース

【身近な人たちからの紹介】

T・A：母親の紹介でガールスカウトを始める
ガールスカウト仲間から、新たな活動を
紹介
高校では学校教育としての地域清掃
大学では友達の紹介によるイベントボ
ランティア

課題と考察

様々なきっかけを通して、ボランティア活動をしている。

【新入生歓迎パンフレット】

T・Y：高校時代では社会活動での老人福祉施設
訪問
大学では新入生歓迎パンフレット「ブラン
カ」を見て

【知人】

K・T：知人から教えてもらった社会福祉協議会
での相談
その後は、ボランティア 社会福祉協議
会

【冊子、ビラ、市政だより】

N・T：小学校で強制参加の中での地域清掃への
友達の誘い
地下鉄にある冊子、区民センターにあるビ
ラ、市政便りを手がかりにボランティア活
動を探す

【ある日、突然】

K・M：ある晩に、突然思い立ったボランティア
活動

課題と考察

【興味とその後の出会い】

- T・A：偶然、ピースボートのポスターが目にとまる
就職活動中に、世界を旅した社長との出会い
就活、継続中のピースボート乗船経験者との出会い
ピースボート事務所での説明会で、説明に加えてのボランティア紹介

【友達、ポスター】

- M・K：大学では、友達からの紹介やポスターを見て

【資質の成長】

- S・S：小学校ではクラス委員等の様々な役割を担った経験
高校では、老人ホームの訪問活動体験
その後のスタディツアーでのタイ訪問

【活動的な本人の資質】

- S・J：学生活動からの引退に伴って余る時間から活動に参加希望

非常に多数のきっかけや活動へと結びつけるような出会いの末に、活動に結びついている稀なケースだろう。

小学校での経験は間接的な要因ではあるが、その後の活動に何らかの影響を与えていると考えられる。(資質が伸ばされたのだろう)

活動未経験者

考察：きっかけとしては、「学校行事」や「友達や家族」などを通してボランティア活動をしている人が、アンケート調査(問3 ボランティア活動のきっかけ・動機)だけではなくヒアリングからも、それが表れ

ている。しかしながら、今回ヒアリングをしてみると、きっかけとしてはさまざまな形で存在しているが、そのきっかけを活動に結び付けているのは外部からのエンパワメントというより、その人自身のボランティア活動に対する想いや考え方（動機）が大きく作用しているように感じられた。

本人の資質も何か関係があるとすれば、その資質をボランティア活動に生かしていくのが課題であると感じた。

支援策： きっかけ（活動分野）の幅を拡充させる

社会福祉分野、国際分野、環境分野が多いため、イベント分野なども拡充して、選択肢を増やしていく。

経験者との交流の場を定期的に設置する

ボランティア活動経験者とこれから始めようとする学生やコーディネーターが集い、交流会を通して、ボランティア活動を身近に感じてもらう。その際、いつも設けるのではなく、日時・場所を設定しながら、「いつでも行ける」ではなく、「この日に行こう」と思える仕組みを作る。

ボランティア活動体験記を作成する

ボランティア活動経験者の体験記だけではなく、ボランティア活動先の受け入れ職員、そこで生活されている方々の感想なども記載する。

講義などに関連させて、情報提供を行う

講義中での情報提供であれば信頼性もあるため、活動を始めやすい。

メールマガジンなどによる身近なボランティア情報提供システムを創設する

気軽にボランティアに関する基本的な情報を得られるようにする。基本的な情報の内容としては、トラブルが起きない程度の内容で、活動分野・活動場所・活動内容など。

ボランティア体験プログラムを開発する

初心者のために、きっかけを増やし、気軽にできるようなボランティアプログラムを開発する。

事前事後学習も行う教育プログラムを開発する

上記のプログラムの発展型として、事前事後学習を行う教育プログラムとして、ボランティア活動を単なる体験活動で終わらせないようなスーパーバイズも行っていく。

第二節． 動機とボランティアイメージとの関連性

(問 15 ボランティア・ボランティア活動のイメージより)

動機がきっかけを生かす働きをした成功ケースの考察から
消極的イメージとして「自分のこと、目標を達成してからやるもの」といっ
た一側面からのみ見てしまい活動の経験がない、もしくは場所を離れてしま
うと活動を辞めて、再開していないケース

【想いと情報提供】

T・A：「私に出来るのなら」という想いと友達
からの誘い

【成功体験】

T・Y：老人福祉施設への訪問が楽しかった

【外国への興味、関心】

K・T：外国に興味がありつつ、何かをやりたい
かった

【興味】

N・T：なんとなく

【意義ある出来事、活動】

K・M：友達と遊ぶ以上に効果的に何かがやり
たかった

課題と考察

お互いのニーズがうまく
合致したケースであ
る。

無意識に特別な活動で
あると考えているのだ
ろうか。

課題と考察

【意義ある出来事】

- T・A：何か自分の核となるようなものを得たい
ピースボートの乗船料金の割引をしてもらう
ピースボートは平和の交流を目的とした活動である。自分たちで船を出す準備をするのだが、これをボランティアとして行えば、多くが乗船説明会のときにボランティアについての説明を受けている。

【意義ある活動】

- M・K：何かの役に立ちたい
自分にしかできないボランティア活動がある

【好奇心】

- S・S：実際に、どんなところなのかを、自分の目で見てみたい、知りたいという好奇心
何かしてみようという漠然とした思い

【自らのニーズとボランティア活動】

- S・J：せっかくの大学生活だから、何かやりたい
仕事にしたい職業の職業体験をしてみたい
活動する中で情報が得られるかもしれない

本人は、自分の活動=ボランティア活動と言う説明をスタッフから受けたが、少し困惑していた。

意味ある体験や就職という自分のニーズとボランティア活動を結びつけている。

考察：きっかけとしては、「何かをやりたい」や「関心があって」などが多い。動機をもう少し詳しく聞いてみると、活動がしたいというよりも、自分のためになる活動を求めている傾向がある。

また、ボランティア活動を始めるときには、「ボランティア活動とは何か」ということは考えず、人と関わる活動がしたい、海外で活動がしたいということを考えて、その活動内で自分が何が出来るのか、何がしたいのかといった考えをしているのではないかと推測する。

ボランティア活動に対して、自分にとって何か意味あるものを求めている人や、現実的に職業体験という自分にとってメリットを得ようとする人と、興味や好奇心から活動をする人の2つに分類できるだろう。中でも、特に何か意味あるものを求めているのが印象的である。また、ボランティア活動をインターンシップ的に捉えている人もいるように感じられる。

支援策： 動機を生かす活動分野の幅を拡充させる

ボランティア＝社会福祉分野である中で、社会福祉ボランティアには抵抗感のある人が多いため、他分野の開発も行う。

経験者との交流の場を定期的に設置する

ボランティア活動経験者とこれから始めようとする学生やコーディネーターが集い、交流会を通して、ボランティア活動を身近に感じてもらう。その際、いつも設けるのではなく、日時・場所を設定しながら、「いつでも行ける」ではなく、「この日に行こう」と思える仕組みを作る。

ボランティア活動体験記を作成する

ボランティア活動経験者の体験記だけでなく、ボランティア活動先の受け入れ職員、そこで生活されている方々の感想なども記載する。

講義などに関連させて、情報提供を行う

講義の内容などに関連させることにより、モチベーションを高めていく。また、講義中での情報提供であれば信頼性もあるため、活動を始めやすい。

ボランティア体験プログラムを開発する

初心者のために、きっかけを増やし、気軽にできるようなボランティアプログラムを開発する。また、このボランティアプログラムをボランティアしたい人とボランティアコーディネーターの協同で開発する。(自分がしたいボランティア活動を自分でプログラム化していく。)

事前事後学習も行う教育プログラムの開発する

上記のプログラムの発展型として、事前事後学習を行う教育プログラムとして、ボランティア活動を単なる体験活動で終わらせないようなスーパーバイズも行っていく。

第三節． ボランティア活動をするに際しての活動段階別必要支援の違い

(問 12 ボランティア活動において欲しいもの、13、14 必要度数より)

現在活動している中で求めているケースの考察から
個人個人の状況や活動の段階によって必要な情報が不足しているケース

【手続きの手軽さ】

T・A：ホームページによる情報公開 活動内容、日時、素人でも可能か、ボランティア活動体験記など

ホームページであれば、足を運ばずして、情報収集ができ、活動の登録・解除ができる
目に付く場所での募集情報が少ない

【情報の選び方】

T・Y：情報のある場所は分かっている
情報の選び方 各団体、受入先の特質 - 日時、やりがい、(ボランティア)の仲間

【ボランティア内容に対する情報】

K・T：初心者でも可能か、頻度、自分に出来るか出来ないか
活動前に体験談はいらない

課題と考察

気軽に、いつでも、情報が得られる環境にあることを望んでいるようである。

情報を多くもつと、その選び方についての支援を必要とし始めるのかもしれない。

【知識、紹介】

N・T：知識、活動紹介

インターネット、ボランティアセンター、
事務所のようなところでカウンター越し
に相談や情報提供

【手軽さ】

K・M：ビラによる情報提供はいらない

ビラはもらわないし、貼っている場所も
分からない

インターネットによる情報提供がいい
ボランティア情報やシンポジウムなどの
企画、イベント紹介のメールマガジン

【必要な情報】

M・K：ボランティアしたい人に必要な情報を伝
える

考察：情報を提供する側にとって、最も使う事が多いビラは、情報を集める側にはあまり求められていないように思われる。インターネットによる情報提供を望んでいる人が多いのは、やはり情報の収集方法の分かりやすさ、使いやすさと、インターネットの普及が要因となっているのだろうか。また、T・Aさんのように、情報を探しにどこかへ行くことが面倒であるという考えをしている人は、他にもたくさんいるように思う。

一方で、最も求められているインターネット（ホームページ上での情報提供）の弱点として、検索エンジンを使って情報を収集する場合、検索エンジンのコンテンツに登録されなければ効果が半減してしまう

ことも、考えなければいけない。そして、最も重大なこととしては、インターネット上で活動の登録・解除まで行ってしまうと、安易な登録・解除につながる恐れがあり、ボランティアの責任性の問題につながってくることである。

支援策： 講義などに関連させて、情報提供を行う

講義の内容などに関連させることにより、モチベーションを高めていく。また、講義中での情報提供であれば信頼性もあるため、活動を始めやすい。

情報提供の場を増やしていく

大学という公的な機関を利用して、入学時・各セメスター始めに、ボランティアを含む情報集積場のお知らせをオリエンテーションや配布資料に明記していく。

経験者との交流の場を定期的に設置する

ボランティア活動経験者とこれから始めようとする学生やコーディネーターが集い、交流会を通して、ボランティア活動を身近に感じてもらう。その際、いつも設けるのではなく、日時・場所を設定しながら、「いつでも行ける」ではなく、「この日に行こう」と思える仕組みを作る。

ボランティア活動体験記を作成する

ボランティア活動経験者の体験記だけでなく、ボランティア活動先の受け入れ職員、そこで生活されている方々の感想なども記載する。

インターネットによる情報提供を行う

インターネット上での登録などはせずに、最低限の情報提供のツールとしてのみ利用し、実際にはボランティアセンターにおいて、相談やボランティア活動の登録や解除が行えるようにする。インターネット上で安易にボランティア活動の登録等が行えると、手続きが手軽すぎて責任感が薄れてしまう危険性がある。

り、それと同時に、個人情報管理の問題も出てくるからである。気軽さと同時に、ボランティアセンターとボランティアとの信頼関係、顔の見える関係づくりを築くことが大切である。

情報提供手段を増やす

上記のほかに、ボランティアセンターに各ボランティア先の活動情報のビラやリーフレットなどを随時置いたり、掲示していく。

第四節． 効果的なボランティア活動のきっかけづくり

(問3 きっかけ、問12 ボランティア活動において欲しいものより)

ボランティア活動のきっかけの多くが

知人からの紹介ケースの考察から

きっかけが知人からの紹介が最も多いにもかかわらず、それを伝える仕組みがほとんど存在していないために友達に紹介しにくいケース

【友達からの誘い】

T・A：小学校の時、母親からの薦め
小中学校のとき、ガールスカウト仲間からの誘い
大学生の時、友達からの紹介
紹介した経験は無し

【独力での情報収集】

T・Y：活動を探す際に、友達を頼るつもりはない
紹介した / された経験は無し

【友達への相談】

K・T：友達や家族にボランティア情報を聞く
紹介した経験は無し

【強制参加内でのモチベーション】

N・T：強制参加の中での近所の友達からの誘い
紹介した経験は無し

課題と考察

多くの人から、様々なボランティア情報を手にいれられる環境にあったために、それが活動に結びついたのだろうか。

課題と考察

【ボランティアされる側への配慮】

K・M：嫌々活動することもあるため、ボランティアの受け手の気持ちを考えると、誘うことはしたくない
紹介した/された経験は無し

【先入観と行動】

T・A：ピースボートの説明会場での誘い
一緒に船(ピースボート)に乗ろうと誘ったことはあるが、心の中では「どうせ来ないだろう」

【自分の関心と相談相手の関係】

S・J：自分の関心のある分野と異なる為、相談経験無し
いろいろな人を巻き込んで行う活動では、紹介(声掛け)は経験あり

【ボランティア紹介、被紹介の日常化】

M・K：友達に誘われて(紹介されて)活動に参加経験あり
紹介経験もあり

他の人とは、やや異なり、ボランティアをする側よりも、ボランティアを受ける側に配慮しているように感じる。

なぜ、「どうせ、来ないだろう」と決め付けてしまうのだろうか。また、決め付けながらも、誘ったのだろうか。

なぜ、自分の欲しい情報をもっていないと決め付けてしまうのだろうか。ボランティアに関する交流(日常会話)がなされないのはなぜだろうか。

非常に稀なケースで、ボランティアを紹介し、されるという関係が自分の周りで作り上げられているように感じられる。

【情報公開による紹介】

S・S：情報公開として紹介経験はあり
紹介（公募）経験あり

考察：何となくボランティア活動がしたいと思っているのではなく、分野でのなボランティア活動がしたいと思っている人は、自分の関心のある分野と異なる分野で活動をしている友達には、ボランティアに関する情報を求めない、求めにくい傾向があるように感じられる。ボランティア活動の基本原則が自主性である一方、ボランティアの受け手の立場もあり、その相違によっては、安易にボランティア活動を興味のない人には紹介にし難いようにも感じられる。

支援策： 経験者との交流の場を定期的に設置する

ボランティア活動経験者とこれから始めようとする学生やコーディネーターが集い、交流会を通して、ボランティア活動を身近に感じてもらう。その際、いつも設けるのではなく、日時・場所を設定しながら、「いつでも行ける」ではなく、「この日に行こう」と思える仕組みを作る。

学習会を開く

体験交流会やボランティアに関する学習会を開くことによって、自分の興味ある分野と違う分野に興味を持っているボランティア同士の横のつながりをつくることができ、他分野のボランティア活動、ボランティアを知るきっかけを作っていく。また、ボランティアコーディネーションについての学習会も行えば、友達に相談されたときに、誰かを紹介したりして、想いをつなぐことができる。

ボランティア活動体験記を作成する

ボランティア活動経験者の体験記だけではなく、ボランティア活動先の受け入れ職員、そこで生活されている方々の感想なども記載する。そこに、友人の体験記が記載されていれば、相談の幅が広がっていく。

情報提供手段を増やす

上記のほかに、ボランティアセンターに各ボランティア先の活動情報のビラやリーフレットなどを随時置いたり、掲示していく。

第五節． ボランティア活動の位置付け

(問5 ボランティア活動をやめた理由 忙しさ)

忙しい中でのボランティア活動実践ケースの考察から
忙しくなってくると、ボランティア活動をやめて、他の活動を優先してしまうケース

【イメージと実態のずれ】

T・A：ボランティア活動とアルバイトと比較して、
「アルバイトはお金がもらえるので誰でもする」
「ボランティア活動は誰でもしているわけではない。やりたい人しかしない」
ボランティア活動はアルバイトよりもニーズが高いこともある
活動をやめた理由は忙しかったからだが、その時々での優先順位で決定

【気軽にできない身近な活動】

T・Y：生活が忙しくなると、ボランティア活動は後回し
ボランティア活動よりも他の活動を優先
他の活動に比べて、ボランティア活動は結果が見えづらく、いつでも出来ると思ってしまう

課題と考察

誰もがしているわけではないことが、ボランティア活動をT・Aさんが行う理由とするなら、大変な活動であるという認識があるのだろうか。

ボランティアイメージは、主観的には限られた世界・重労働で、客観的には普通である。

どのような結果が見られれば、このイメージが変わるのだろうか。

いつでもできるが、後回しになっている自己矛盾の解決策の1つは、モチベーションの恒常化と考えられる。

課題と考察

【余暇活動の一環】

K・T：生活の時間・金銭的余裕がないと活動は難しい

【優先順位】

N・T：優先順位として、勉強が第一であとはそのとき次第

【生活リズムと活動リズムのずれ】

K・M：続けづらさ、やりづらさとして
活動時間と自分の勉強時間が合わないこと
活動先の仲間が社会人ばかりで、会話しづらいこと
活動先の考えとボランティアセンターで説明された内容が異なっていること

【無理のない活動スタイル】

T・A：自分の空いている時間だけでいいので活動している

【活動に対するモチベーション】

S・J：何かで忙しい時は興味があっても、その活動以外にはやりたいとは思わなかった

【生活の忙しさ】

M・K：アルバイトで忙しくて、活動をやめた事がある
時間的余裕がないことには、割り切っている

これは、ボランティア活動に限らず、解決すべき課題であり、コーディネーターの問題であると思われる。

課題と考察

【両立と掛け持ち】

S・S：活動していく中で、勉強していくと、2足のわらじは履けない
時々しかmeetingに来ないと、役割を任せられない
本人の自己満足に終わってしまう

考察：ここではボランティア活動をやめた原因だけをピックアップしていることを、まず押えておく必要があると思う。

どんな活動もやめることはあり、上記のケースを全て支援して、やめない状態にもっていくことが必ずしも良いわけではないはずである。問題点の改善により、続けたいと思ったときに続けられるような支援を考えていくことが必要であると思う。

そう考えると、残る課題としては、ボランティア活動のやめ方だと思う。無責任に連絡を何もしない状態でやめるのではなく、相手方にしっかりと伝え、また受け入れ側も執拗にやめさせないような対応をしないでいられる体制作りが望まれる。同時に、再び活動したいと思ったときに、受け入れられる体制や活動したい想いをしっかりと支援できる仕組みなどを作ることも必要だと考えられる。

忙しくなったときに、ボランティア活動を辞めてしまう理由として、正課の活動と課外活動との違いがあるのではないか。

支援策： 経験者との交流の場を定期的に設置する

ボランティア活動経験者と再び始めようとする学生やコーディネーターとの交流会を通して、遠のいてしまっていたボランティア活動を身近に感じてもらう。その際、いつも設けるので

はなく、日時・場所を設定しながら、「いつでも行ける」ではなく、「この日に行こう」と思える仕組みを作る。交流だけではなく、しんどいときや新たにはじめるときの相談の場としての機能ももたせていく。

学習会を開く

ボランティアに関する学習会を開くことによって、ボランティア活動自体はできなくても、学習会を通してボランティアに関する情報を得たりして、ボランティア活動との関わりを保っていく。

ボランティア活動体験記を作成する

ボランティア活動経験者の体験記だけではなく、ボランティア活動先の受け入れ職員、そこで生活されている方々の感想なども記載する。そこに、友人の体験記が記載されていれば、相談の幅が広がっていく。

情報提供手段を増やす

メールマガジンなどを通じて情報を発信し続けることで、情報をいつでも入手できる状態にしておく。またボランティア活動先との関係を保つために、月に1回位の割合で活動先の様子をボランティアセンターに送ってもらい、それをボランティアセンターがボランティアに情報を提供していくことにより、時間が空いたときに少しでも活動しようというボランティアのモチベーションを高めたり、維持していける仕組みにしていく。

ボランティアと学び（勉強）をつなげる

全国大学生協連合会の調査で、学生が一番したいことは「勉強」であるという調査結果が出ていた。ヒアリングの中でも優先順位で勉強を上位に挙げている人が多い。学びと関連させていくことは必要であるが、利己的なボランティアにならないように、ボランティアの受け手、社会にまで目を向けられるようにスーパーバイズしていく必要がある。

活動体験プログラムを開発する

自分に活動が合っていなかったために、継続していなかった、もしくはイメージが消極的になったのではないか。施設に行くだけがボランティアではないにも関わらず、1つの活動を経験しただけで悪い印象などを受けてしまうのはもったいないため、自分に合うボランティア活動を見つけてもらうために、いくつかの活動をセットにして行ってもらおう。

辞めやすい環境づくり

1度始めたら、やめられないような仕組みではなく、ボランティアの自由意志と責任において、活動できる環境をつくっていく。

第六節． ボランティア・ボランティア活動に関する^{ひかり}魅力

(問 15 ボランティア・ボランティア活動のイメージ 積極的 より)

魅力が見えづらいボランティア活動を

積極的に捉えているケースの考察から

ボランティア活動経験に反映されるボランティア活動の魅力が感じづらい
ケース

【自己成長と人とのつながり】

T・A：いろいろな人に出会える
知らない世界に触れること
人間的な成長につながる
出来ることは少なくとも、人の役に立て
る

【非日常的な場面での学び】

T・Y：普通の暮らしでは知ることの出来ない
ことを知ることができる
障害を持つ方にとっての困難さ
自分とは異なった文化をもつ人と出会え
る
生きていく上で、これらのことがすごく
意味のあることになる

課題と考察

自分にプラスになるこ
とを魅力にしている傾
向がある。

ボランティア活動の対
象が、やや日常生活とは
離れたところでの活動
であるように感じられ
る。

課題と考察

【学びと（社会に対する）意識の変化】

K・T：インターンシップのような学び

いろいろな人との出会いも魅力であるが、これは他の活動（アルバイトなど）でも可能

ボランティア活動を通して、それに関連する社会問題、社会事情を意識的に気にするようになる

内容の理解が早くなるような気がする

このようにマクロな視点で捉えられたのは、何が要因であるのだろうか。

【結果の重要性】

K・M：児童と関わるボランティア活動では、普段の大人の目線だけではなく、子どもの目線で夢を見られる

相手が喜んでくれれば、活動が続けられる

自分の活動がもたらす効果や結果が重要

ボランティア活動が、非日常的なものとなり、それがK・Mさんには良い影響を与えているように感じている。

相手の喜びに自分の喜びを見い出している。

【自分へのメリット】

T・A：自分のやっているピースポートでのボランティア活動では、割引制度としてのお金がもらえる

知り合いが増える

自己成長の場として、捉えているように感じられる。

【ボランティア活動の互酬性】

S・J：元気になれる

課題と考察

【ボランティア活動の互酬性】

M・K：一緒に楽しむもの・自己覚知・機能向上・持ちつ持たれつ・相互に利益享受
かわいそうとは思わなくなった

【自己成長】

S・S：内面を磨ける
知らないことを知る事ができる

自己成長の場として、捉えているように感じられる。

考察：実態調査で挙げられた活動自体の楽しさ、自己成長、出会い、生きがいなどが、ヒアリングでも挙げられている。また、様々な捉え方がある（個人だけを捉えた見方（自己成長）、社会をも捉えた見方（社会問題に関心が出る））。しかしながら、活動分野は異なっても、ボランティアから得られるものは、ある共通したものがあるように思われる。活動の経験のないS・Jさんと活動の経験のあるほかの人たちとの差として、ボランティア活動の魅力の多さと体験的なところが考えられる。相手の喜びに自分の喜びを見い出したり、自分にとってのメリットを多く感じているようである。

支援策： 経験者との交流の場を定期的に設置する

楽しかったこと、つらかったことなどをいろいろな人と共有する場を設定する。そういう場であれば、活動をしている上での相談もしやすいし、情報の交換もできるため。

活動をする中での気づきをスーパーバイズする

自分の活動が他者や社会へどういう影響を与えているかなどを考え、目が向けられるようにフォローアップ（事後学習）をしていく。自分自身が感じる魅力を他者へ伝え広げられるように機会をつくり、魅力を増幅させていく。

ボランティア活動体験記を作成する

ボランティア活動経験者の体験記だけでなく、ボランティア活動先の受け入れ職員、そこで生活されている方々の感想なども記載する。活動の魅力を膨らませることができるようにする。

第七節． ボランティア・ボランティア活動に関する^{かげ}欠点

(問 15 ボランティア・ボランティア活動のイメージ 消極的 より)

ボランティア活動においてのつらさを抱えながら
活動しているケースの考察から
ボランティア活動経験があり、ボランティア活動の欠点を受け入れて活動しているケース

【目に見える魅力】

T・A：目に見える魅力・メリットがない
時間を裂いて活動しているという感じは
否めない

【結果の見えづらさ】

T・Y：他の活動に比べて、ボランティア活動
は結果が見えづらく、いつでも出来ると
思ってしまうため、生活が忙しくなると、
ボランティア活動は後回し

【自分の生活とイメージ、実態】

K・T：「誰でも気軽にできる」イメージがある
が、実際は異なる
生活の時間・金銭的余裕がないと活動は
難しい

【排他的・閉鎖的イメージ】

N・T：世界が狭すぎる。一部の人(福祉)だ
けでやっている
(消極的意味として)すごい

課題と考察

可視的な魅力を求めているようである。

自分の中で、ジレンマがあるように感じられる。

課題と考察

【ボランティアの理想と現実】

S・J：お金にならない。ボランティアを仕事ではできない
活動資金集めが大変

【人間関係での悩み】

M・K：人間関係に悩むこと
やめようと思っても、やめられないこと
ボランティア人材不足から、団体間での引き抜きのようなやり取りがあること

【ボランティアの役割】

S・S：ボランティア活動でバザーを「社会参加」を目的に障害者と共に出していても、気が付くと「利益や楽しいだけ」のように目的と手段が変わることがある

現実的な金銭面でのリスクの大きさが、目に付いているようである。

考察：実態調査で挙げられた活動の捉え方として、活動そのものよりも生活の忙しさが、ヒアリングの中でも挙げられている。

S・Sさんが指摘している問題点と、他の6人が感じている結果が目に見えづらいこととは、関連があると思われる。楽しさが目的とならないと、自分たちの活動の目的がわからず、不安定な状態になってしまうため、目的と手段が入れ替わってしまうのではないかと考えられる。結果・魅力が見えにくい、感じにくい。もちろんそれらは人それぞれだが。ボランティア活動に特別なこと、他では得られないものを得たいという期待が大きいのではないか。逆に言えば、そういうものが得られないと期待はずれの感が大きいのではないか。人から伝えられるイメージがよく聞こえ、初めからうまくいくはずもないので、イメージとのギャップが大きく感じるのではないか。

また、サークルとボランティアの違いは何か。サークルも交通費、活動費、部費などがかかるが、金銭的余裕がないなどあまり問題になっていない。やはり、まだボランティアは日常的ではなく、人のためにしているという感覚がどこかにあるのではないか。

支援策： 経験者との交流の場を定期的に設置する

楽しかったこと、つらかったことなどをいろいろな人と共有する場を設定する。そういう場であれば、活動をしている上での相談もしやすいし、情報の交換もできるため。

活動をする中での気づきをスーパーバイズする

自分の活動が他者や社会へどういう影響を与えているかなどを考え、目が向けられるようにフォローアップ（事後学習）をしていく。自分では気付いていない活動の意義などをフォローアップしていくことにより、消極的イメージを積極的イメージに転換させられるきっかけにしていく。

ボランティア活動体験記を作成する

ボランティア活動経験者の体験記だけではなく、ボランティア活動先の受け入れ職員、そこで生活されている方々の感想なども記載する。様々な角度からボランティア活動を捉えられるようにしていく。

事前事後学習を行うボランティア体験プログラムを開発する

ボランティアプログラムをボランティアしたい人とボランティアコーディネーターの協同で開発することにより、自分が求めているボランティア活動へ近づけられる。（自分がしたいボランティア活動を自分でプログラム化していく。）また、辛い経験などを事前事後学習を通して、意義ある活動であると、実感できるようにしていく。

第五章 . 具体的支援を可能にする体制

立命館大学ボランティアセンター設置を視野に入れて

第一節 . ボランティアセンターを地域にではなく大学に設置する意義

今回の調査により、初めて立命館大学生のボランティアの意識・活動実態を明らかにすることができた。実際、(財)内外学生センターの行った全国の調査と比べても「現在ボランティア活動をしている」人の割合は高く、また、個人だけでなく、サークルやクラブ活動としてボランティア活動をしているところも少なくない。学生の多様な学びの創造 インターンシップ等、産業社会学部においては、すでに、私たちが行っているスチューデントイニシアチブ科目「企画研究」(自主企画研究)以外にも同 (学部インターンシップ) やボランティアコーディネーター養成プログラム、ヒューマン・サービス実習など、いくつかの教育プログラムが存在している。また、従来のAO入試とは別に新たな入試方式として高校時代のボランティア体験により、入学の可否判定を行うというボランティアスタディ入試も実施され、今後、ますますボランティアへの関心と学びの欲求が高まることが予想される。

大学のホームページには、以下のような記載がある。「立命館大学では、学生が行う課外・自主活動などの自主的・集団的取り組みを、『学びと成長の場』として位置づけ、様々な援助を行っている。この間の取り組みの中で、学生が組織する団体や活動の内容は年々多様になっており、活動実態の正確な把握とそれに合わせたより広い支援が必要になっている。その実態把握のひとつとして、学生部では、本学で課外・自主活動を行う全ての団体に『エントリーシート』『活動計画書』の提出を促し、各団体が掲げる活動方針・到達目標等の把握を行う。『エントリーシート』『活動計画書』を提出した団体は、『課外・自主活動 研修支援金』『課外・自主活動 団体助成金』の申請を行う基礎資格を有することになる³⁾」。

立命館大学自己評価年次報告 2001 によると、「課外活動参加率は 1998 年度約 27%(学生数比)まで減少したが以降は一貫して上昇し、2001 年度 46.5%

まで回復した。この主な要因は登録団体参加者の増加と、公認パートの『中央系』の集計方法の変更による。2000年度より課外活動の財政的援助である『課外・自主活動個人奨励金』『団体助成金』『研修支援金』制度がスタートし、一定の効果が見られる⁴⁾と、自己評価している。しかしながら、これまで立命館大学では学生のボランティア活動の実態把握が十分なされているとは言えず、教育・学習的な評価や支援する環境整備が行き届いているとも言えないのが現状である。そこで、私たちは「情報提供」「相談の場」であることはもちろん、ボランティア教育プログラムの研究・開発とその実践機能を備えたボランティアスタディセンターを設置したいと考えている。

平成14年7月29日には青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策などについて、答申が中央教育審議会より出された。中央教育審議会答申より、「青少年の現状を見ると、多くの人や社会、自然などと直接触れ合う体験の機会が乏しくなっている。 <中略> このような中で、青少年に、社会の構成員としての規範意識や、他人を思いやる心など豊かな人間性をはぐくんでいくためには、社会奉仕体験活動、自然体験活動など様々な体験を積み重ね、社会のルールや自ら考え行動する力を身に付け、自立や自我の確立に向けて成長していくことができる環境を整備することが求められている。また、そのような機会の充実を図ることが、将来にわたって、日常的に社会に役立つ活動に主体的に取り組む人間に成長していく基盤を作ることにつながる⁵⁾」

このように行政からも、大学生を含む青少年における奉仕活動・体験活動の必要性を出し、大学や企業、行政に対し、ボランティア活動をする青少年の奉仕・体験活動を推進するように明記されている。これらの現状も踏まえ、私たちはボランティアスタディセンターという形で、立命館大学生のボランティア活動の推進をしていきたいと考えている。

私たちは、大学とは「学びの場」であると考えている。学生に最も身近な場所である大学にボランティアセンターを設置するということは、学びによる成長の機会を提供する場として最適な環境であると言える。加えて、ボランティア活動は、自己の可能性を求めて“自己実現”のための学びであると同時に、「自分たちの通う大学や地域社会を自分たちの手でよりよい場にし

たい」という大学自治やさらには市民社会の構築へとつながると考えている。大学内だけのいわゆる座学だけではなく、地域社会や世界全体を教室としたサービス・ラーニング⁶⁾のような学びが、私たちの理想とするボランティアスタディセンターの設置により、よりスムーズに学術的・教育的な価値のあるものにもなるであろう。それには、地域との強固な信頼関係が必要不可欠なはずである。現在、立命館大学には産業社会学部で開講されているボランティアコーディネーター養成プログラムのように地域から受講生を募集して実施するプログラムを筆頭に、さまざまな公開講座の開催などによる地域貢献を通じて、地域社会との関係も存在しており、また社会人学生も多く在籍している。これらの貴重な資源をうまく活用し、地域に開かれた大学の地域に根づいたボランティアセンターを設置したい。地域の力を借り、地域に貢献する、その中で人々のパワーやスキルが循環し、地域社会が活性化していく、その拠点となるようなボランティアスタディセンターこそが私たちの理想とするものである。ここでは、具体的なボランティアセンターの設置構想ではなく、必要性と意義にとどめておきたいと思う。

ここで1つ考えなければならない重要な問題がある。これまで、ボランティアセンターを大学に設置する意義について述べてきたが、そもそもボランティアセンターが必要なのかということが、まだ論じられていないので、ここで論じていきたいと思う。

ボランティアセンターが必要な理由として、実態調査によって明らかとなったボランティア活動を阻む様々な要因に対して、それを解決もしくは緩和していくための方法を実践するためには、ある程度の基盤と実体が必要である。ただし、ボランティアセンターと一言で言っても、様々な形態をもっていていいはずである。それ以上に、設置する地域のさまざまな実情、大学の方針とそこで学ぶ学生の意識などを把握した上で、検討していくことが必要であろう。そう考えていくと、いわゆるボランティアセンターとしてのハコモノの事務所を構えながら、相談に来た学生に情報を提供するコーディネーター業務だけではなく、大学と学生の協働のもとに、既成概念にとらわれない、創造性に富み、かつアカデミックに日本の大学の最先端を走る立命館大学に見合ったボランティア支援組織・機関を創造していくことが、最も有意義な研究・実践であると考えている。

第二節． 他大学ボランティアセンターの実態概要

1．ボランティアセンター設置時期と目的

龍谷大学

教育研究の一環（2001年4月）

神戸大学

地域社会における豊かでよりよい社会の実現を目指す。（1995年9月）

長野大学

ボランティアの活動の良さに多くの学生が触れてもらう。学生のボランティア活動の推進。（1999年3月設立、10月法人格取得）

明治学院大学

大学におけるボランティア教育、ボランティアセンターとしての社会貢献。（1999年）

淑徳短期大学

学生のボランティア活動を支援するとともに、地域の様々な団体とグループとの連携との協力の下、地域に開かれた活動を展開していく。

東京ボランティア・市民活動センター

市民一人ひとりの自己実現やよりよい生き方を可能とするような『市民社会』の実現。（1981年）

きょうと学生ボランティアセンター

ボランティア活動の機会の提供と支援。（1996年10月、任意団体設立、2000年5月法人格取得）

関西学院

関西学院を拠点に、学生・教職員・市民のボランティア活動を推進する。（1995年4月）

高梁学園

ボランティア活動への思いのある人や、活動に参加したい人々のために、適切なボランティア活動の機会や、情報を提供するなどの役割を担っている。（2000年）

A P U（立命館アジア太平洋大学）

アンケートの結果より、APU 学生のボランティアへの意識が高い現状を踏ま

え、ボランティアに興味のある有志で設立した公認サークル。(2001年6月)

2. ボランティアセンター体制

龍谷大学

大学が設置し、ボランティアスタッフが関わる。大学・学生協働型として運営。

神戸大学

大学公認の学生組織として運営。

長野大学

特定非営利活動法人として運営。

明治学院大学

大学・学生協働型として運営。

淑徳短期大学

大学主導設置型として運営。

東京ボランティア・市民活動センター

東京都社会福祉協議会が設置、運営。

きょうと学生ボランティアセンター

特定非営利活動法人として運営。

関西学院

大学・学生協働型として運営。

高梁学園

大学・学生協働型として運営。

A P U

大学公認学生サークルとして運営。

3. 活動内容

龍谷大学

ボランティアコーディネート、NPO 活動支援、シンポジウムなどの開催。

神戸大学

ボランティアコーディネート。地域社会の向上。

長野大学

相談受付、情報発信、イベント企画、勉強会企画、保険加入、世代間交流事業、ホームヘルパー2級、ガイドブック発行。

明治学院大学

ボランティアコーディネート、情報収集、ボランティア保険の代行手続き、講義への協力。

淑徳短期大学

ボランティア情報室運営（情報提供など）、学生のボランティア活動支援、学生のボランティアグループ支援、授業（ボランティアワークへの事務補助）、図書資料の貸し出し、情報の発行、関係機関との連携。

東京ボランティア・市民活動センター

NPO に対する総合的支援事業の実施、プラットフォーム型協働事業の推進、ボランティア・市民活動推進機関の強化支援、多様なボランティア活動の体験や情報提供の充実

きょうと学生ボランティアセンター

学生ボランティアサポート事業、ボランティアマネジメントサポート事業、ネットワーク事業。

関西学院

ボランティア・市民活動の情報化支援活動、阪神・淡路大震災メモリアル企画「白いリボン運動」の実施、ボランティア活動についての相談・募集情報の収集・提供、情報誌・メールニュースの編集、発行

A P U

ボランティアセンター開設に向けて、スタッフと会員を募集しながらの活動。他大学のボランティアセンターの人達との交流。

4 . 利用対象者

龍谷大学

学生、地域

神戸大学

会員（神戸大学生）

長野大学

学生

明治学院大学

明治学院大学全学学生、教職員

淑徳短期大学

淑徳短期大学全学学生、教職員（依頼者は地域も。ただし、個人は除く）

東京ボランティア・市民活動センター

市民全般

きょうと学生ボランティアセンター

学生

関西学院

学生

高梁学園

学生

A P U

学生

5．利用人数／日

龍谷大学

10人

明治学院大学

10～15人

淑徳短期大学

673人／年

高梁学園

45人／年

6．教育との関係

龍谷大学

NPO へのインターンシップ・・・、全国 NPO センターとの連携

神戸大学

なし

明治学院大学

教育プログラムとのリンク

淑徳短期大学

授業の事務補助、支援

きょうと学生ボランティアセンター

ボランティア学習事業

関西学院

ボランティア活動の実践の場

高梁学園

学術研究機関。

7. 課題

龍谷大学

学生が来づらい、学ボラスタッフの組織化、学舎間の情報格差、ボランティアコーディネーションの充実、学生ボランティア系サークル、団体のネットワーク作り、授業との連携、地域との連携

明治学院大学

職員の配置、施設がほしい、予算、

淑徳短期大学

ボランティアワーク履修者の減少、学生のリスクマネジメント、ボランティアコーディネーションに対する教職員の理解の乏しさ

<引用文献・資料>

- 1) スチューデントイニシアチブ科目「企画研究（自主企画研究）」募集要項
- 2) 李妍 著『ボランティア活動の成立と展開』ミネルヴァ書房 2002年 73ページ
- 3) 課外自主活動援助制度
- 4) 立命館大学自己評価年次報告 2001
- 5) 青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について（答申） 2,3ページ
- 6) 中央教育審議会の最終答申内でのサービスラーニングの定義は、『「社会の要請に対応した社会貢献活動に学生が実際に参加することを通じて、体験的に学習するとともに、社会に対する責任感等を養う教育方法」であり、大学教育と社会貢献活動との融合を目指して、アメリカ等において、大学の正課教育の中にボランティア活動等の社会貢献活動を導入したもの。』

<参考文献・資料>

- ・ 李妍 『ボランティア活動の成立と展開』ミネルヴァ書房 2002年
- ・ 筒井のり子『ボランティアコーディネーター その理論と実際』（福）大阪ボランティア協会 1997年
- ・ 『ボランティアコーディネーター白書』（福）大阪ボランティア協会 1999年
- ・ 『ボランティアに関する大学生の意識調査』
- ・ 課外自主活動援助制度 <http://www.ritsumeai.ac.jp/kic/sa/>
- ・ 『「学生のボランティア活動に関する調査」の概要』（財）内外学生センター <http://www.naigai.or.jp/japanese/Volunteer/book1/research.htm>
- ・ 青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について（答申） http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/index.htm
- ・ 東京ボランティア・市民活動センター <http://www.tvac.or.jp/>
- ・ 立命館大学自己評価年次報告 2001 <http://www.ritsumeai.ac.jp/mng/gl/somu/nenji/jk/index.html>

- ・各大学ボランティアセンターリーフレット
 - 龍谷大学ボランティア・NPO活動センター
 - 関西学院ヒューマンサービスセンター
 - 立命館アジア太平洋大学学生ボランティアセンター
 - 明治学院大学ボランティアセンター
 - 淑徳短期大学ボランティア情報室
 - 佛教大学ボランティア室
 - 神戸大学総合ボランティアセンター
 - 高梁学園ボランティア活動センター
 - 長野大学ボランティアセンター ふらっと
 - アジア太平洋大学学生ボランティアセンター
 - 高梁学園ボランティアセンター
 - NPO法人 きょうと学生ボランティアセンター
 - 東京ボランティア・市民活動センター

【付録資料】ボランティア活動に関する意識・実態調査 調査票

ボランティア活動に関する意識・実態調査

本調査目的は、立命館大学産業社会学部ボランティアコーディネーター養成プログラム修了学生を中心に、ボランティア活動について企画研究の講義において調査研究をしています。この調査結果は統計的に処理をし、本研究以外には使用いたしません。

回答の際のお願い。1ページ目より順番に回答して行ってください。前に戻っての回答や1度回答したものの訂正はしないで下さい。選択式の場合は、当てはまるものをつけて、記述式の場合は()に書いて下さい。また、指定がある場合は指示に従ってください。

ボランティア研究自主ゼミ
調査代表者：産業社会学部4回生 白樫 俊

生活実態調査

問1 以下の表の当てはまる項目を埋めてください。

学部(学生)	学科・学系・専攻・コースなど		
1. 産業社会学部			
2. 法学部			
3. 文学部			
4. 国際関係学部			
5. 政策科学部			
教職員	担当学部・配属施設名		
1. 事務室			
2. 大学機関			
3. 生協職員			
4. その他			
年齢	1. 19歳以下	2. 20-23歳	3. 24-27歳 4. 28歳以上
性別	男 / 女	回生	()
該当者は	を 障害学生 / 留学生	住居形態	自宅 / 下宿
所属団体(サークルなど)	()		
現在、一番熱中していること 時間を使っていること	()		
社会人学生の方への質問			
大学での主要生活時間	昼(朝含む) / 夜		
仕事の形態	フルタイム / パート		

問2 現在、悩んでいること、困っていることで自分ひとりでは解決できない問題がありますか？あれば、以下の()に書いて下さい。

()

問3 現在、やりたいことはありますか？ あれば、以下の()に書いて下さい。

()

ボランティア意識調査

問1 ボランティア活動はしたことはありますか？

- a. 現在している b. 過去にしていた c. したことがない

【問1でaもしくはbと答えた方のみ】

問2 それは、どんなボランティア活動ですか？ 当てはまる記号に をつけてください。また、「期間」「活動ペース」「時期」についても、当てはまる記号を に書いて下さい。(長期の目安は、1ヶ月以上とさせていただきます)

期間：a=長期 b=単発

活動ペース：c=定期 d=不定期

時期：d=現在 e=過去

	期間	活動ペース	時期
a. 社会福祉に関わるボランティア活動			
b. 国際交流や国際問題、留学生に関わる活動			
c. 環境問題に関わる活動			
d. 募金活動			
e. 阪神淡路大震災などの災害時の活動			
f. スポーツ大会やイベントなどの運営			
g. その他()			

【問1でaもしくはbと答えた方のみ】

問3 上記のボランティア活動をしたきっかけは何ですか？

- a. 知人に誘われて b. ポスターや冊子を偶然見て
 c. ボランティア活動に感心があり探して d. 義務付けられていた
 e. 内申点や社会的評価を上げるため f. 何かをしたかった
 g. 偶然入ったサークルがボランティアサークルだった h. 勉強のため
 i. その他()

【問1でaと答えた方のみ】

問4 どうして今も続けているのですか？

()

【問1でbと答えた方のみ】

問5 なぜ、ボランティア活動をやめたのですか？

- a. 金銭的負担が大きいから
- b. 忙しくなったから
- c. つまらないから
- d. 職員とうまくいかないから
- e. バイトとやっていることが一緒だから
- f. 活動場所が家から遠いから
- g. つらい思いをしたから
- h. やめてくれと言われたから
- i. その他()

【問1でcと答えた方のみ】

問6 なぜ、ボランティア活動をしたことが無いのですか？

- a. 興味が無い
- b. きっかけ(情報)が無い
- c. 自分のやりたいボランティアが無い
- d. する必要が無い(したくない)
- e. アルバイトをしている方がいいから
- f. お金がかかるから
- g. 時間が無いから
- h. 偽善だから
- i. 世間でボランティアと呼ばれているものはしているが、自分はそう思っていない
- j. その他()

【ここからは全員お答えください】

問7 ボランティアサークルもしくはボランティア活動もしているサークルやクラブに所属していますか？

	サークル名	活動内容(ボランティアに関わる)
現在		
過去		

問8 もし、ボランティア活動をして欲しいという要望があればどうしますか？

断る

受ける

理由は？() 理由は？()

問9 時間が空いたらアルバイトとボランティア活動のどちらをしてみたいですか？

a. アルバイト

b. ボランティア活動

c. 両立

問 10 どんなボランティア活動をしたいですか？（問 2 の a～g の中からお選び下さい）

- () (具体的に)
- () (具体的に)
- () (具体的に)
- () (具体的に)
- () (具体的に)

問 11 ボランティア活動をするなら、どこでしたいですか？

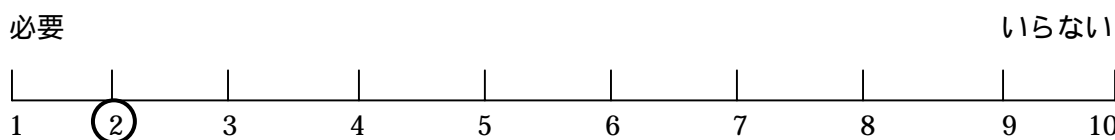
- a. 自宅周辺 b. 大学内 c. 大学周辺
- d. 通学途中 e. 見知らぬ土地 f. その他 ()

問 12 ボランティア活動が始めにくい、続けるのが大変などと思ったときに、何があればよかったですか？（例：ノートテイクなどのスキルアップ講座）

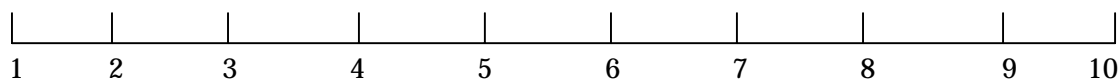
[]

問 13 活動するに当って、以下の質問についてグラフ内でもっとも近いと思われる数字に付けてください。

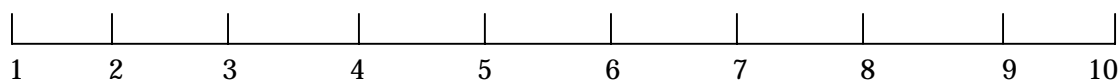
(例) ボランティアセンターの設置



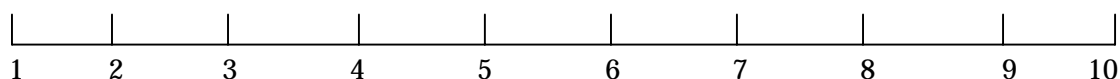
(1) 技術や知識向上の研修会



(2) 相談の場を設ける



(3) 情報を提供する



(4) 経済的支援をする

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

(5) 活動先の拡充

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

(6) ガイドブックの作成

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

問 14 上記の問 13 の(1)から(6)の中で、1～5に をつけたものの中から、最も必要であると思うもの上位2つを選んで下さい。() ()

問 15 ボランティア・ボランティア活動のイメージは？

()

《お願い》ボランティアに関するヒアリング調査に協力していただける方は、以下にお名前とご連絡先をご記入ください。

氏名 _____

連絡先 _____

アンケートにご協力いただき、ありがとうございました。